

大輪寺東遺跡

中世城館跡の発掘調査

序

本書は、1989年度に実施した主要地方道韮崎櫛形豊富線建設に伴う大輪寺東遺跡の発掘調査報告書であります。

本遺跡の所在する韮崎市には、縄文時代の遺跡として学史的にも著名な「坂井遺跡」を始めとして、国指定史跡「新府城跡」など各種の遺跡が数多く知られています。近年、圃場整備事業がさかんに行なわれておりますが、これに伴う発掘調査で弥生時代の水田址や平安時代の大規模な集落跡等の発見が相次ぎ、この地域の重要性が改めて認識されているところであります。もともと、この地域は武田氏発祥の地とされているところであり、武田氏関係の史跡がよく残されている地域でもあります。中世城館跡については、新府城や能見城など大規模なものがあり、釜無川右岸一帯にも武田信義の要害城といわれる白山城やその館跡等が残されております。

今回調査が行なわれた地は、この釜無川右岸の旭地区に位置し、武田氏の重臣甘利氏の館跡が所在していたと伝えられているところであります。「甲斐国志」によりますと、大輪寺という寺院の境内がこれにあたるとの事でありまして、付近には僅かながら土塁が認められるとともに、北門、大堀等の城館にかかる地名も残されております。発掘地域はこの大輪寺の東側に該当し、幅12m、長さ220mに亘って調査されたものであります。

調査の結果、戦国末期とみなされる建物址・溝・石列・墓壙などが発見され、この地に館が構えられていたことが明らかになりました。さらに、13世紀代の遺物もみられることから、館跡の年代はこの時期にまで遡ることが考えられます。遺物については、陶磁器類を中心として、石製品や木製品が出土しております。特に溝からは、曲物・蓋・自在鉤・漆塗り椀等の木製品やクリ・タルミ等の堅果類それに炭化米などが出土し、当時の生活の跡をしのぶことができます。このように、館跡の所在が確認されたことは大きな成果でありますが、居館主については「甘利氏」かどうかの確認はできませんでした。今後の調査研究に期待されるところでもあります。

なお、中世の遺構以外にも弥生時代の土器が出土し、また平安時代の住居も発見され、この地が長く居住の地として利用されてきたことがわかります。これらの成果が今後の研究の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、調査にあたってご指導・ご協力を賜った関係機関各位、ならびに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1990年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

- 1 本報告書は主要地方道並崎櫛形豊富線建設事業に先立ち、山梨県埋蔵文化財センターが実施した並崎市旭町上条北割字宮下にある大輪寺東遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は新津　健、丸山哲也、吉岡弘樹が分担執筆し、その文責を文末に明記した。編集は新津、丸山が行なった。
- 3 遺物実測、トレス、図面整理は、玄間千鶴、内藤真千子、山路宏美、吉岡歌子、塩島博夫の協力を得て、丸山、吉岡が行なった。
- 4 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管している。
- 5 陶磁器については、国立歴史民族博物館小野正敏氏、瀬戸市歴史民俗資料館藤澤良祐氏に御教示いただいた。
- 6 石製品については、帝京大学山梨文化財研究所河西学氏に石質鑑定をお願いした。
- 7 発掘調査から報告書作成にいたるまで並崎市教育委員会山下孝司氏の協力を得た。

凡　　例

- 1 遺構・遺物挿図の縮尺は原則として次のとおりである。
〔遺構〕 全体図1/200、建物群1/80・1/100、住居址1/50、石列1/60、溝1/80、墓壙1/20
〔遺物〕 土器1/3、木製品・石製品1/3・1/5、柱根1/5、錢貨1/1
- 2 遺構断面図中の、レベルポイント部分にある数字は、標高を表す。
- 3 遺構平面図の小穴中あるいはその付近の数字は、小穴の深さを表す。また、小穴の番号を「P」で表現したものもある。この場合「P」Noの次ぎの()内数字が、その小穴の深度を表す。　　例　P 5 (46) ……小穴番号5号、深さ46cm

目 次

序

例言・凡例

第1章 調査の経過と概要	9
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 発掘調査の概要	9
①発掘調査の経過	9
②遺構・遺物の概要	10
③調査組織および協力者	11
第2章 地理的環境	12
第1節 遺跡の立地	12
第2節 周辺の遺跡	12
第3章 発見された遺構・遺物	16
第1節 弥生時代の遺構・遺物	16
1. 土器集中区（集中区1, 2, 3）	16
2. その他の遺物	18
第2節 平安時代の遺構・遺物	21
1. 住居址（第1, 3号住居址）	21
2. 土壙（第1号土壙）	23
3. 土器集中区（集中区4）	28
4. その他の遺物	29
第3節 戦国時代の遺構・遺物	30
1. 建物群（第1号建物群 第1, 2, 3号溝 第1, 2, 3号暗渠 第2号建物群 第10号溝）	30
2. 住居址（第2号住居址）	42
3. 石列（第1, 2号石列）	45
4. 溝（第4, 5, 6, 7, 8号溝）	47
5. 墓壙（第1, 2号墓壙）	55
6. その他の出土遺物	57
第4章 遺構・遺物の検討	64
第1節 弥生時代の遺構・遺物	64
第2節 平安時代の遺構と遺物	64
1. 住居址と土壙について	64
2. 第3号住居址出土土器の時代的位置付け	65
第3節 戦国時代の遺構と遺物	66
1. 土師質土器について	66
2. 各遺構の時期と性格	69
3. 甘利氏館跡と大輪寺東遺跡	72
4. 館跡の範囲	74

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	13	第23図 第2号住居址出土土器実測図	44
第2図 発掘区域図	14	第24図 第1・2号石列・第1号墓墳実測図	46
第3図 地籍図(明治27年作成)	15	第25図 第1・2号石列出土遺物実測図	47
第4図 土器集中区1・2及び第7号溝実測図	17	第26図 第4・5・6号溝実測図	48
第5図 土器集中区3実測図	18	第27図 第4・6号溝出土遺物実測図	49
第6図 第3区出土土器実測図	19	第28図 第4号溝出土木製品実測図	50
第7図 第3区出土土器実測図	20	第29図 第4号溝出土曲物実測図	51
第8図 第1号住居址・第1号土壤実測図	21	第30図 第8号溝実測図	53
第9図 第1号住居址出土土器実測図	22	第31図 第8号溝出土木製品実測図	54
第10図 第1号土壇出土土器実測図	22	第32図 第2号墓墳実測図	55
第11図 第3号住居址実測図	23	第33図 第2号墓墳出土土器実測図	56
第12図 第3号住居址出土土器実測図	24	第34図 銭貨(1, 2, 1号A建物・3~8号 2号墓墳)	57
第13図 第3号住居址出土土器実測図	26	第35図 第1区採集品	57
第14図-① 第3号住居址出土土器実測図	27	第36図 第2区出土土器実測図	58
タ -② 第3号住居址出土土器刻畫部分	27	第37図 石器実測図	59
第15図 第3号住居址出土須恵器	28	第38図 石製品実測図	60
第16図 第1号建物群実測図①	31~32	第39図 石臼実測図	61
第17図 第1号建物群実測図②	33~34	第40図 石臼・石製品実測図	62
第18図 第1号建物群出土土器実測図	35	第41図 石造物実測図	63
第19図 第2号建物群実測図	39	第42図 大輪寺東遺跡出土土師質土器の分類	67
第20図 柱根実測図①	40	第43図 前縁の範囲	75
第21図 柱根実測図②	41	付図 遺跡全体図	
第22図 第2号住居址実測図	43		

図版目次

- 図版 1 大輪寺東遺跡遠景
大輪寺東遺跡近景
大輪寺東遺跡 1 区と大輪寺
- 図版 2 第 1 号建物群
- 図版 3 第 1 号建物群 B 第 1 号建物群 A
第 1,2 号溝 第 1 号溝セクション
第 1 号建物群 A 白堀作業風景
- 図版 4 暗渠検出状態 暗渠蓋石除去状態
暗渠交差状態
- 図版 5 第 2 号建物群
第 2 号建物群 P2,3,4 検出状態
- 図版 6 第 2 号住居址
第 2 号住居址出土土器
第 2 号住居址柱根検出状態
- 図版 7 第 4,5,6 号溝 第 4 号溝セクション
第 4 号溝遺物出土状態
- 図版 8 第 4 号溝遺物出土状態 第 8 号溝
第 4 号溝白堀作業風景
- 図版 9 第 1 号・2 号石列
第 1 号墓塚 第 2 号墓塚
- 図版 10 第 1 号住居址 第 1 号土壤
第 3 号住居址
- 図版 11 第 3 号住居址西側部分
住居址カマド 置き柱
柱根（北） 柱根（南）
- 図版 12 土器集中区 1,2,3
- 図版 13 土器集中区 1,2,3 出土土器
- 図版 14 第 1 号住居址出土土器
第 1 号土壤出土土器
第 3 号住居址・カマド出土土器
- 図版 15 第 3 号住居址出土刻書土器 刻書部分
- 図版 16 第 3 号住居址・カマド出土土器
土器集中区 4 出土土器
第 2 区 B—11 区出土土器
- 図版 17 第 3 号住居址出土土器
第 2 号住居址出土土器
第 2 号墓塚出土土器
- 図版 18 1 区採集遺物 土師質土器
青磁・白磁
- 図版 19 第 1 号建物群出土陶器
第 2 号住居址出土陶器
第 1 号石列出土陶器
第 2 区 B—4・8 区出土陶器
- 図版 20 陶磁器片
- 図版 21 第 2 号墓塚出土銭貨
第 1 号建物群出土銭貨
第 1 号溝出土自然遺物
- 図版 22 第 1 号溝出土自然遺物
第 4 号溝出土自然遺物
- 図版 23 第 4 号溝出土自然遺物
第 4 号溝出土桜の皮
- 図版 24 第 4,8 号溝出土木製品
- 図版 25 第 2 号石列出土編み物
石製品 鉛錠
- 図版 26 第 1 号建物群出土茶臼
暗渠出土石臼
- 図版 27 暗渠・墓崎市内出土石製品
第 1 号石列・暗渠出土五輪塔
- 図版 28 第 1 号石列出土五輪塔
墨書き部分赤外線写真

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

大輪寺東遺跡は山梨県韮崎市旭町上条北割字宮下に位置している。1988年（昭和63年1月30日）、山梨県土木部韮崎土木事務所から県教育委員会文化課に、この地域における県道の新設（仮称「旭バイパス」）についての事業計画が提出された。そこで、文化課から依頼を受けた県埋蔵文化財センターでは、遺跡台帳との照合や事業計画地における分布調査を実施した。その結果、道路建設予定地内には、周知の遺跡「甘利氏館跡」が所在するとともに、現地には弥生時代や平安時代の土器、さらには中・近世の陶磁器が散布していることが確認できた。

その成果をもとに教育委員会文化課・埋蔵文化財センター・土木部道路建設課・韮崎土木事務所など関係機関で協議を行ない、道路建設工事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

この協議に基づき、文化課と道路建設課とでは1989年（平成元年）6月1日、発掘調査についての協定書を締結した。発掘調査は、山梨県埋蔵文化財センターにより、同年6月1日から9月30日まで実施された。また、現地調査終了後、引き続き整理作業が行われ、報告書作成にいたった。

文化財保護法に基づく手続き

- 1989年（平成元年）5月1日 山梨県教育委員会教育長 発掘通知を文化庁長官宛提出
- 1989年（平成元年）12月19日 文化庁より発掘通知の受理通知
- 1989年（平成元年）10月13日 山梨県教育委員会教育長 遺物発見通知を韮崎警察署長宛提出

第2節 発掘調査の概要

①発掘調査の経過

発掘調査は、道路工事が実施される区間で、遺物が分布し、しかも地形的に遺跡の範囲と見なされる幅12m・長さ220mを対象とした。

遺跡名については、周知の遺跡として中世城館跡「甘利氏館跡」があるが、中世の遺跡であることは確実ながら、現状では「甘利氏館」跡の確証なく、加えて弥生時代や平安時代の遺跡でもあることから、「大輪寺東」遺跡とした。「大輪寺」という名称を用いたのは、第2章でも述べるように、「甘利氏館」の跡に建立された寺院として「甲斐国志」に記載されている、この地域の歴史を表す名称だからである。今回の調査地域は、現存する「大輪寺」の東側に該当している。

発掘調査は、調査区を横切っている道路を基準に便宜上、南側から1区・2区・3区と区分し（第2図）、順次実施していった。各区内には、1辺が5mの方眼を設定し、東西方向にA・B・

Cとアルファベットで標記し、南北方向に1～13ないし14と数字で表現した。従って、各グリッドはA-1、C-13というように表し、遺構の位置を記述するとともに、遺物の取上げも行なった。

調査の順序については、まず試掘を行ない、遺物の包含層や遺構検出面をつかむことから開始した。1区は大半が水田、2区、3区も現状は畠地であったが、かつては水田として利用されていたらしく、表土下に酸化層（水田の床土）が発達していた。その下に10～30cmの厚さに黒褐色土が堆積しており、さらに遺物を包含する黒褐色土、ないし遺構検出面である砂質土層へと至っている。そこで遺構へは影響を及ぼさない範囲の、水田の床土あるいはその下の黒褐色土の一部までは重機を用いて耕土を行なった。その上で先に述べたようなグリッドを設定し、以下は人力により掘り下げ、調査を進めていった。地区ごとによる調査経過および整理作業の進行については以下のとおりである。

- 機材運搬 1989年（平成元年）6月1日
 - 試掘調査 6月5日～6月8日（1区～3区）
 - 1区発掘調査 6月8日～6月26日（1号建物群及び周辺・1号～3号溝等）
7月25日～8月10日（1号建物下層及び周辺・8号溝）
 - 2区発掘調査 6月27日～7月19日（1号石列・4～6号溝・1号墓壙等）
8月10日～9月8日（2号、3号住居・9号溝・建物群・
2号墓壙等）
9月20日～9月26日（3号住居拡張）
 - 3区発掘調査 7月11日～7月25日（1号住居・7号溝・土器集中区）
9月7日～9月21日（土器集中区、弥生時代の自然流路）
 - 機材整理・撤出 9月27日～9月30日
 - 整理作業 10月2日～12月27日
- 1990年（平成2年）1月8日～1月31日
- 報告書作成・執筆・事務処理 2月1日～3月31日

②遺構・遺物の概要

調査により発見された遺構は以下のとおりである。

- 弥生時代 土器集中区3ヶ所
- 平安時代 住居2軒（1号・3号）
- 戦国時代 住居1軒（2号）
建物群2群（1号・2号）
溝10本（近世も含む）
石列2基（1号・2号）
墓壙2基（1号・2号）
暗渠（戦国末～近世・近代）

これ等の遺構からは、多くの遺物が出土したが、特に戦国期に関するものが主体である。建物群や住居からは、陶磁器類・土師質土器・内耳土器などの土製品、砥石・ひで鉢などの石製品、北宋銭等が出上し、溝からは曲物類・蓋・自在鉤・漆塗り椀・などの木製品やカヤ・クルミ・クリ・ウメ・モモ・茶・等の種子類、それに炭化米などが出土した。石列からは、五輪塔の火輪や墨書きされた地輪が発見された。また、建物群や住居では、柱根の残る柱穴も確認されている。そのほか、館が廃棄された戦国末以降近世・近代にかけて、何本も暗渠が作られていくが、これには、石臼や地輪・それに井戸掘り等に用いる鍛轆の軸受石などの石製品が用いられていた。墓壙では、北宋銭6枚や土師質土器5個を伴った例もある。他に、数は少ないが弥生時代の変形土器も出土している。また、平安時代の住居からは、須恵器の杯・壺、土師器の杯や変形土器が出土した。

(新津 健)

③調査組織および協力者

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 新津 健（山梨県埋蔵文化財センター副主査・文化財主事）

丸山哲也（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

作業員・整理員

秋山松義・秋山半蔵・湯舟延幸・湯舟儀憲・久保田ひさ子・小野初美・清水達夫・樋口富士長・笹本嗣雄・笹本松枝・前川岩男・秋山貞雄・小野良治・功刀まゆみ・根岸小春・中込俊義・鈴木恒吉・河手寿子・中村雪江・松田かね代・堀込静子・堀内としえ・竜澤徳子・出月満寿江・矢崎ます子・小林よ志子・中沢典子・斎藤百代・米山とくの・出月遊鬼子・中込よしみ・長田可祝・梅林はなの・長田和子

協力者・機関 茅崎市教育委員会・山梨県茅崎土木事務所・旭町宮下地区・笹本礼治・大輪寺大谷寛岳・小野甲治郎・花輪正嗣・金丸栄輝・進藤孝俊・帝京大学山梨文化財研究所

第2章 地理的環境

第1節 遺跡の立地

大輪寺東遺跡は、山梨県韮崎市旭町上条北割字宮下に位置する。本遺跡の立地する段丘は、標高400m程の韮崎段丘と呼ばれている。韮崎段丘とは、釜無川によって形成されたもので、北から円野・清哲・神山・旭・大草・竜岡としだいに幅を広げていく。北部では幅500m、最南端では3,500mにおよび、その輪郭は、南北に狭長な台形を呈すものである。段丘の北西側には、段丘崖線が切り立ち、比高は現川床面から平均20mである。その続には、釜無川の氾濫がある。西には、旭山・甘利山から南アルプスへと山々が連なる。南には、大扇状地を持つ御動使川が、段丘を開析して流れくだる。段丘上の様子は、御坊沢を境にして、東西で大きく様子が異なる。

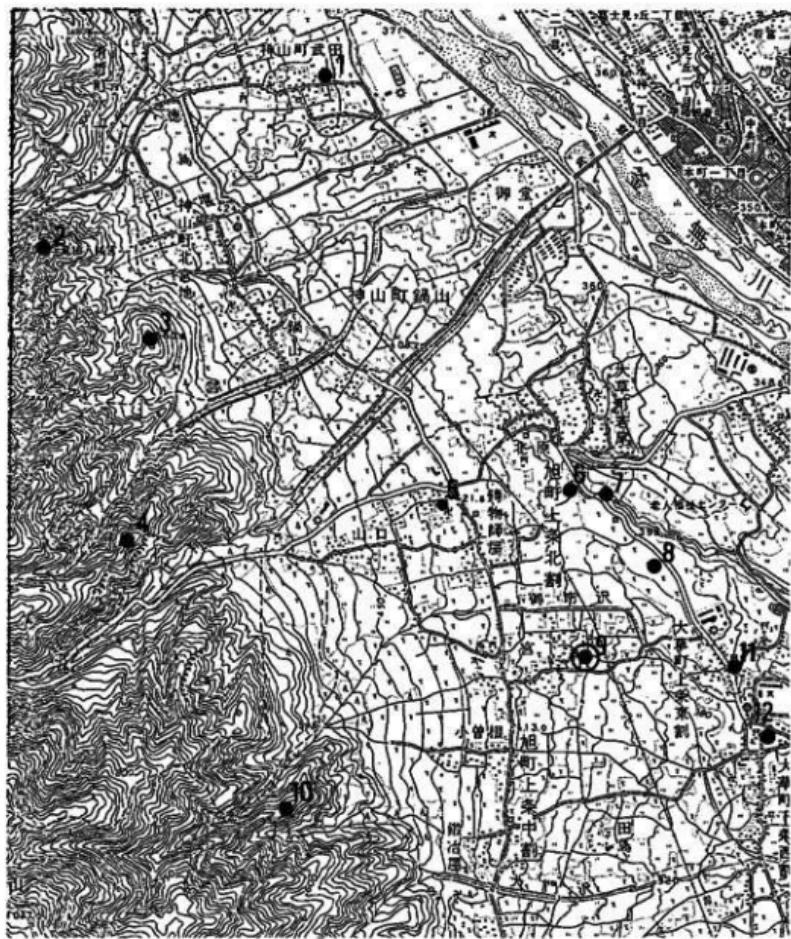
段丘上の西側は、甘利沢・御坊沢などによって形成された小規模な複合扇状地がある。扇状地の中央を江戸時代に作られた「徳島堰」が流れ、堰に沿うようにして、集落が発達している。東側は、乾燥した起伏にとんだロームの小丘が続き、桑園・果樹園などに利用されている。段丘の中央部は、西側の山地から多くの沢が流れ下り、段丘面を侵食している。このあたりは、段丘の水の集まるところであり、水田として利用されている。古くは低湿地であったことがうかがわれる。

大輪寺東遺跡は、段丘上の西側部分、御坊沢扇状地の標高390m程のところにある。遺跡付近には湧水があり、これより東側は水田地帯が広がっている。西に向かってはすぐ宮下の集落があり、さらに進むと桑園・果樹園が広がり、山林へと続く遺跡の北側は、御坊沢と接している。御坊沢は、数年前まで天井川であった。

第2節 周辺の遺跡（第1図）

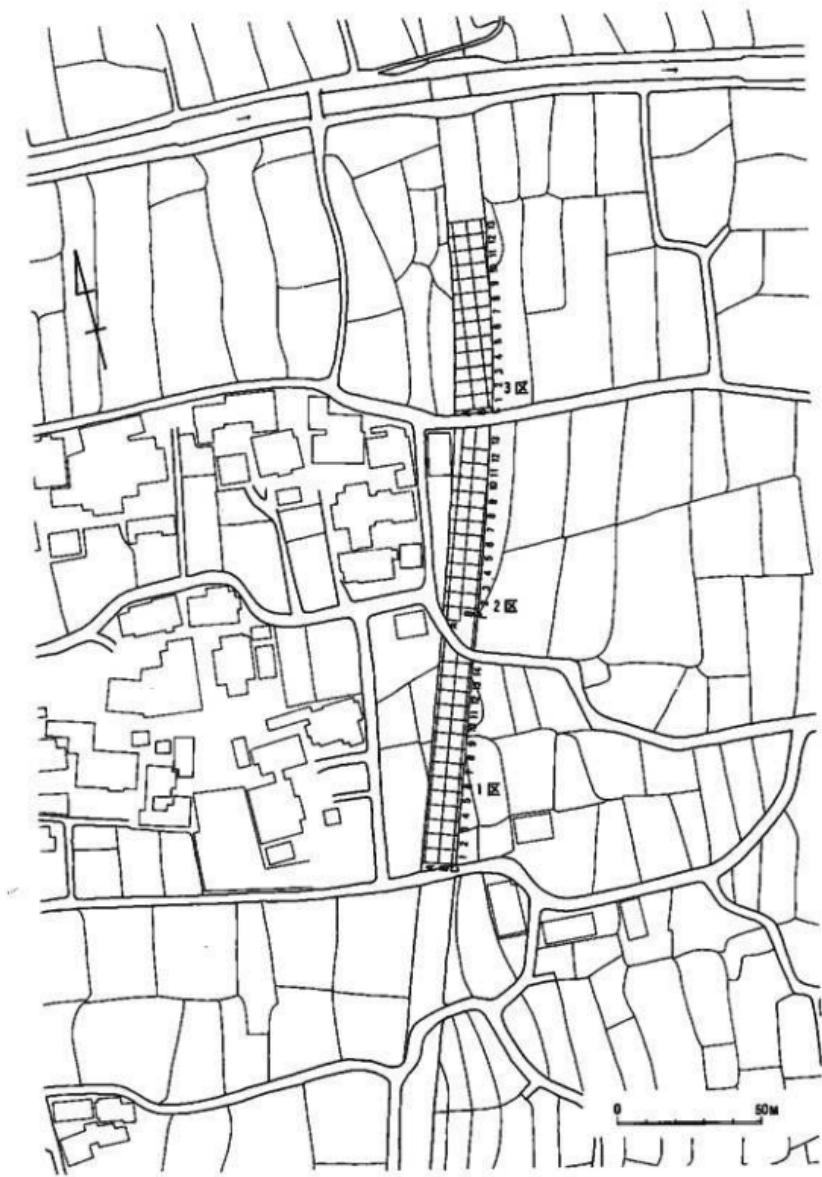
本遺跡の周辺には、縄文時代から中世の遺跡まで多数の遺跡が存在する。韮崎段丘の東側ロームの作る段丘には、縄文時代から古墳時代に至る遺跡が確認されている。縄文時代早期の茅山式土器が表面採取された大石遺跡、縄文時代と弥生時代の土器、石器が採集されている金山遺跡・羽根前遺跡・下馬城遺跡・長塚道下遺跡などがある。古墳時代の遺跡としては、久保屋敷遺跡がある。古墳は、集落に近く開発が進んでいることから現存するものは少ない。東芝タンガロイ工場の裏手には、堅穴式石室を持つ古墳があったことが知られている。昭和の初期に開発され、その時出土したという鉄鉢1本と太刀2本、石室用材の一部の偏平な割り石を所有する人がいる。その更に南には、古墳らしい塚が認められるが、遺跡であるかどうかは、未確認である。段丘上の東側は、水はけの良い段丘地帯であることにくわえ、河川も少なく水害にもあいにくい。しかも、西に下るとせせらぎと水田に適した湿地帯が存在することから、居住地として好条件であったと考えられる。

古代末から中世にかけては、韮崎段丘周辺に甘利氏が存在したと考えられている。実際こうした



- | | | |
|-----------|----------|-----------------|
| 1 武田信義館跡 | 5 永明院墨土 | 9 大輪寺東遺跡(甘利氏館跡) |
| 2 白山城北烽火台 | 6 金山遺跡 | 10 扇平 |
| 3 白山城 | 7 久保屋敷遺跡 | 11 無名墳 |
| 4 ムク台烽火台 | 8 大石遺跡 | 12 羽根前遺跡 |

第1図 遺跡の位置 (1/1)



第2図 発掘区域図 (1/2,000)

莊園を生活基盤とした中世城館跡も周知の遺跡とされている。竜岡段丘の北方、韮崎市神山町武田には、市指定史跡武田信義館がある。武田信義は、甲斐源氏清光の次男であったが兄よりも秀で甲斐源氏の総領的地位にあったとされている。^注 武田信義館跡から南西に約1,200mの所には、武田信義の要害城であったといわれている白山城がある。さらに白山城の北西には白山城北烽火台、南にはムク台烽火台がある。

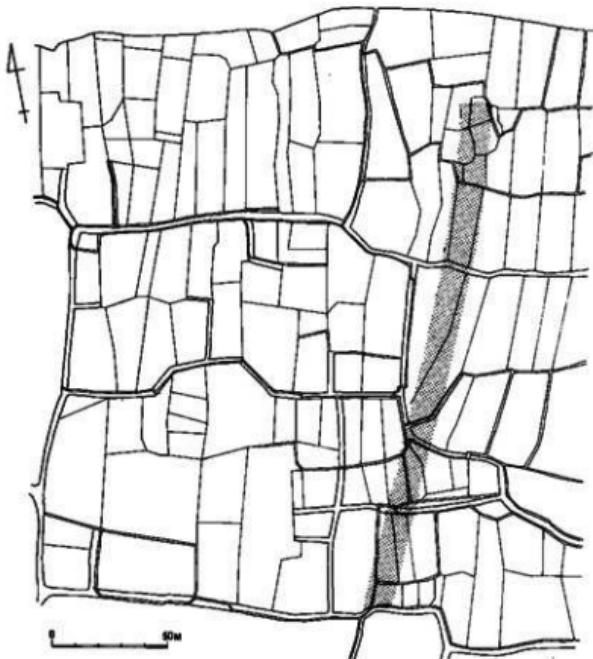
大輪寺東遺跡の西には、甘利山大輪寺がある。武田信義の子、一条忠頼は、次男行忠を甘利ノ荘司に封じた。よって行忠は甘利を苗字とし、庄の要地に居館を構えた。甘利山大輪寺の周辺が、行忠の子孫甘利氏累代の居館と伝えられている。「甲斐国志」によれば東西100間、南北200間余であり、南を大庭、北を北門といい、東に矢立・的場、西に大堀と呼ぶ地名が在し、居館の周りには、土塁や空堀の跡がはっきり残っていたという。大輪寺の南西1km、標高600mの尾根上に要害城である扇平がある。

（丸山哲也）

註 ①清水喜蔵・樋口正 「地形・地質」『韮崎市誌』上巻 1978

②山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第1集『久保屋敷遺跡』

③佐藤八郎 「中世 甲斐源氏」『韮崎市誌』上巻 1978



第3図 地籍図（明治27年作成）（約1/2,500）

第3章 発見された遺構・遺物

第1章で述べたように、本遺跡からは弥生時代・平安時代・戦国時代の遺構や遺物が発見されている。以下、これらについて時代順に記述していく。

第1節 弥生時代の遺構・遺物

1 土器集中区

土器集中区1（第4図）

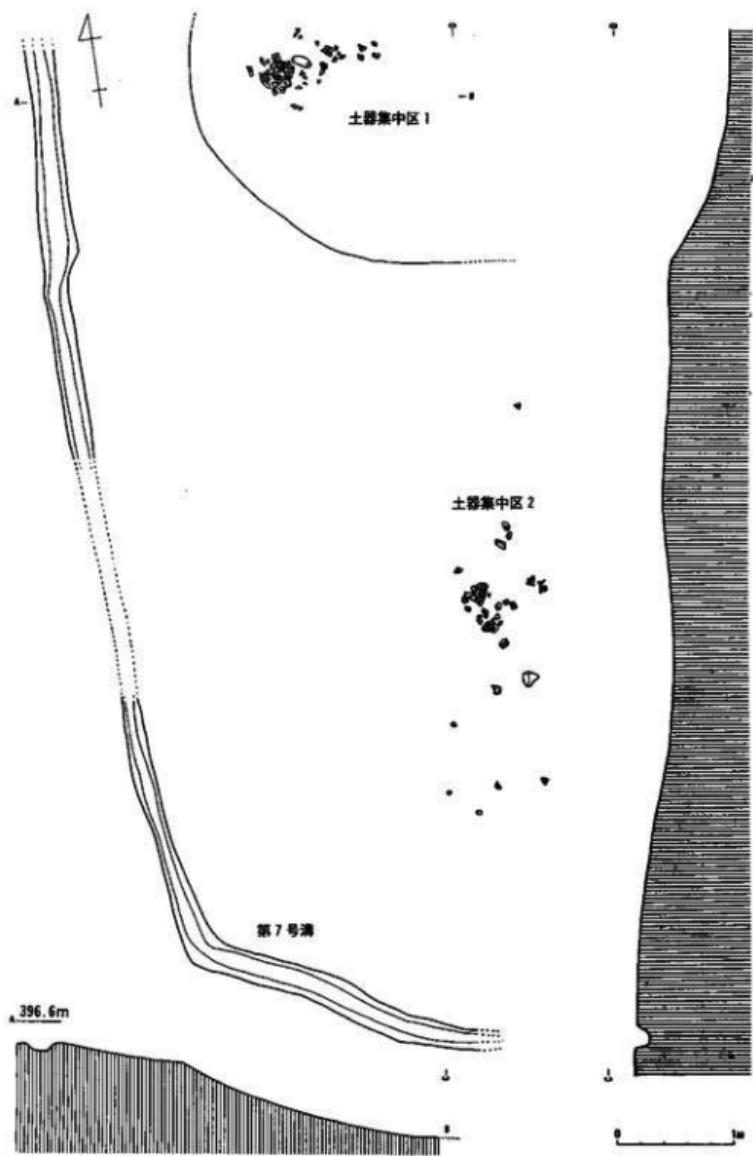
第3区のA-12からB-12区にかけて、黒色粘土層に軟質部分が認められた。これを掘り下げたところ長軸8m短軸2.4m深さ1mを呈する落ち込みが検出できた。この落ち込みの東側は、水田により削平されており検出不可能であった。この地区は、御坊沢に近いことから沢の流路であったかもしれない。掘り進むと同時に、多量の水が涌きだし発掘は困難を極めた。落ち込みの上層部からは内黒土器などの平安時代の遺物が、下層部からは弥生時代末の遺物が、出土している。その他、木片も多数出土しているが加工したものは、認められなかった。

（出土遺物）3は、台部を欠く台付甕。口径22.8cm、胴部最大径25cmを測る。口唇部に刻み状の押圧を施し、外面はハケ目調整を全面に施した後、胴下半部はさらにヘラ磨きをしている。なお、胴上半部はススが付着し胴下半部は二次焼成を受けている。内面は口縁部にハケ目を残し、胴上半部はヘラ磨きがみられ下半部は輪積み痕を残す。色調は暗茶褐色を呈し、焼成・胎土ともに良好である。第7図2は、壺形土器の口縁部破片である。口径18cmを測る。折返し口縁の形態をとる。外面はハケ目調整の後ヘラ磨き。色調は乳褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

土器集中区2（第4図）

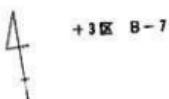
第3区A-11区、黒色粘土層に張り付くように弥生後期の土器が出土した。2個体が復元可能であった。土器集中区1では、何種類もの土器片が出土したのに対し、土器集中区2では、2個体分だけで他のものは出土していない。

（出土遺物）（第6図-2・第7図-5）2は、台部を欠く台付甕。口径13.3cm胴部最大径14.6cmを測る。口唇部に刻みを施す。外面は、口縁部にハケ目調整をわずかに残すほかは、丁寧にヘラ磨きされている。台部との境は、指頭圧痕が認められる。内面上部はヘラ磨きが施される。色調は暗茶褐色を呈し、内外面共にススの付着が認められ、外面下部は二次焼成により赤変部分もある。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良好である。5は、甕下半部である。底径9cmを測る。外面はハケ目調整が施され、底部には指頭圧痕があり、木葉痕が残る。内面は、丁寧に調整



第4図 土器集中区1・2及び第7号溝実測図 (1/50)

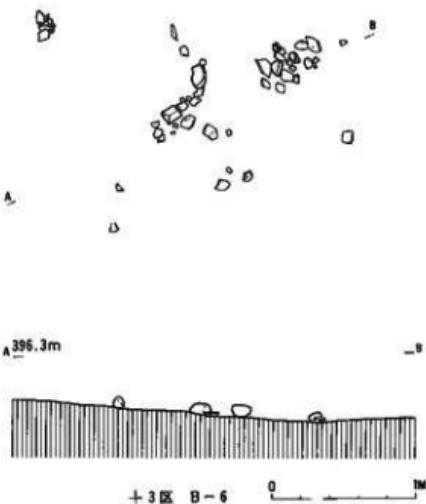
がなされている。色調は暗茶褐色を呈し、ススもわずかに付着する。



土器集中区3 (第5図)

第3区B-6区・C-6区にまたがるように土器集中区3がある。水田の床土を剥がしたところに黄土色のローム層があり、そのやや黒みかかった部分を5cmほど掘り下げるとき、地面に張り付いたように土器が出土した。2個体が復元可能であったが、そのほかの土器は、出土していない。住居跡であることも想定して精査したが、遺構は検出できなかった。

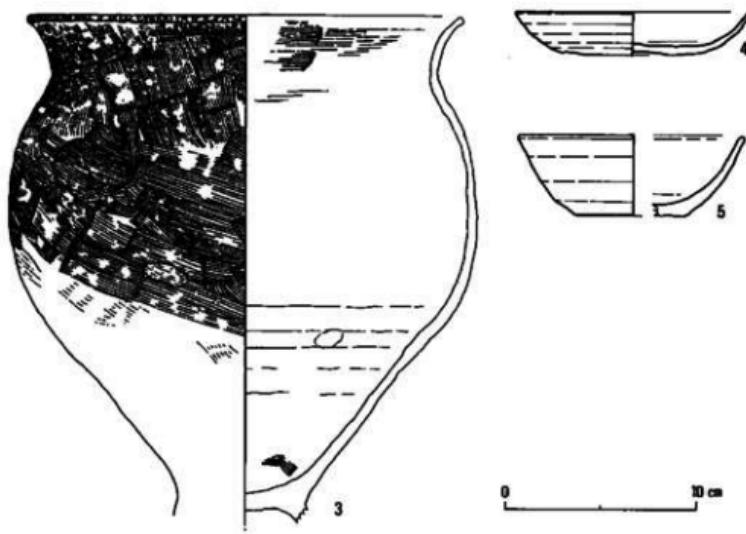
(出土遺物) 第6図-1は、壺形土器の1/2程度の破片。高さ22.6cm、口径19.4cm、胴部最大径20.5cm、底径8.4cmを測る。口唇部には刻みを施し、外面は全面にハケ目調整。内面は口縁部のみにハケ目調整、胴部はヘラ磨きが施される。色調は暗茶褐色を呈し、底部にススの付着がある。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。第7図-1は胴部中ほどまで存在する台付壺。口径15cm、胴部最大径17.6cmを測る。口唇部に刻みを残すほかは、摩耗が激しく調整は不明である。色調は乳茶褐色を呈す。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。



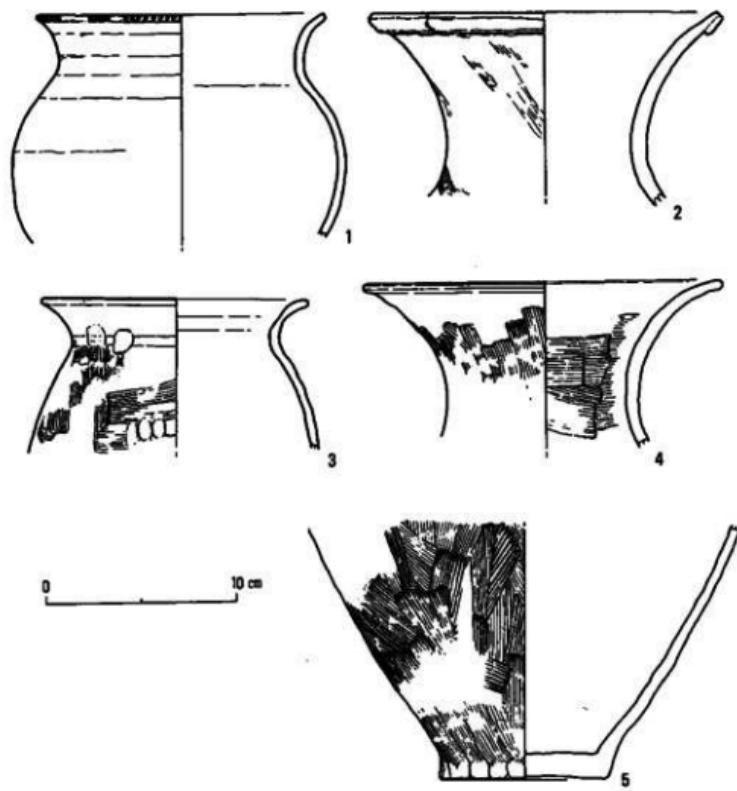
第5図 土器集中区3実測図 (1/40)

2 その他の遺物 (第7図・第36図)

第36図15は台付壺の脚部の破片。第2区B-9区より出土する。底径10.6cmを測る。内面にヘラ削りが、外面接合部にはハケ目が施される。色調は茶褐色を呈す。胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。16は小型の壺の破片。2区B-9区より出土する。底径5.4cmを測る。外面にはわずかにハケ目を施し、底部に指頭圧痕を残す。内面には横方向のハケ目を施す。色調は外面赤茶褐色、内面黒褐色を呈す。胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。



第6図 第3区出土土器実測図 (1/3)



第7図 第3区出土土器実測図 (1/3)

第7図2は、第3区C-4区出土の変形土器の破片。色調は乳褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

第7図3は、大石遺跡(第1図-8)周辺にて、笠本嗣雄氏の桑園より耕作中に出土したとされる古墳時代の変形土器の胴上半部。口径14cmを測る。口縁部はナデ。外面には不規則なハケ目。内面にはヘラけぎりを施す。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが焼成は良好である。

(丸山哲也)

第2節 平安時代の遺構・遺物

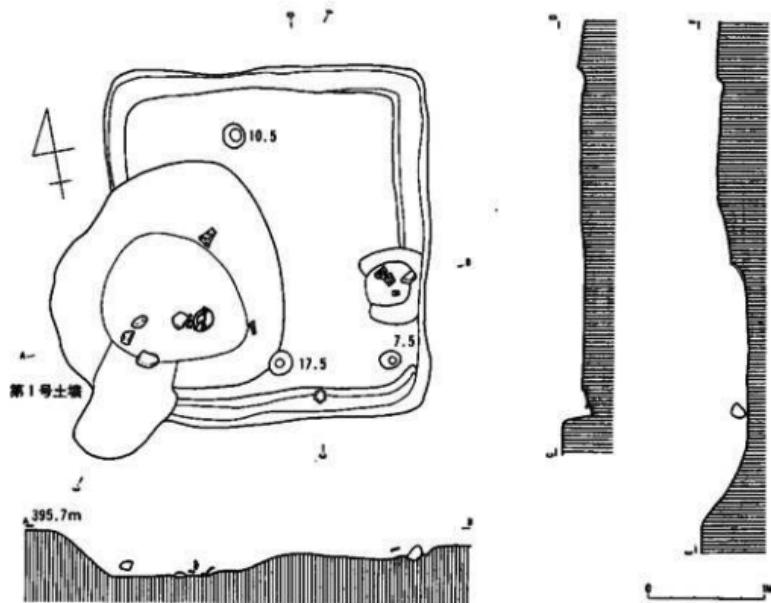
1 住居址

第1号住居址（第8図）

第3区のA—3とB—3区に位置する。水田の床土までを表土剥ぎしたところ、黄褐色土に黒色土をベースにした方形のプランを確認できた。住居の南西部約1/3程度を第1号土壤によって削られている。

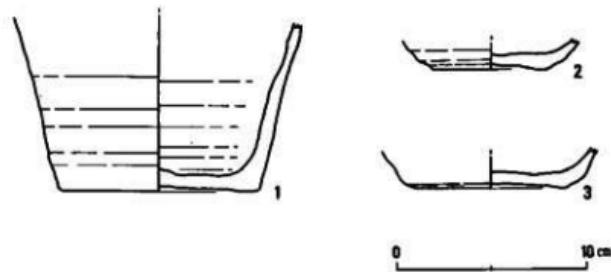
南北3.1m、東西2.8mのはば正方形を呈する。壁は最も高い所でも25cm、低い所では5cmしか残っていない。覆土の堆積状況も不明という、極めて保存情況の悪い住居である。周溝は東側の一部を除いて確認できるが、深さ1~8cmという浅いものである。床面はほぼ平らで、やや軟らかい。柱穴は3本検出でき、床面より7.5cm・10.5cm・17.5cmをそれぞれ測る。竈は東壁南側に位置し、袖の底部の痕跡と焚き口及び燃焼部に焼土を認めるのみである。焼土中から甕の底部が出土している。

（出土遺物）（第9図）1は甕形土器の底部1/2の破片。竈より出土。底径10.4cmを測る。

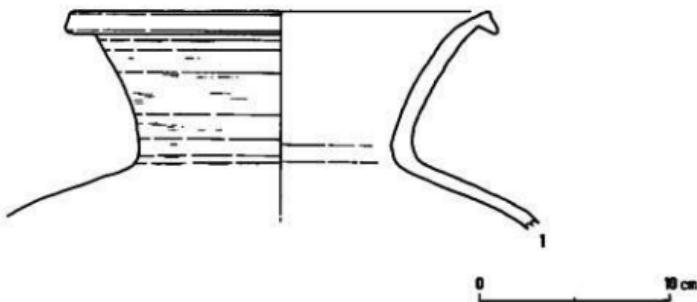


第8図 第1号住居址・第1号土壤実測図 (1/50)

磨耗が著しく内面にロクロ整形痕を残すのみである。色調は、外面乳茶褐色・内面赤茶褐色を呈し、胎土は荒く1mm程度の砂粒を多量に含む。焼成は良好である。2は須恵器の壺の底部の破片。東壁際の周溝より出土。底径5.8cmを測る。磨耗が著しいため判別できない。酸化炎による焼成のため色調は淡乳茶褐色を呈し、軟質である。胎土には砂粒を含む。3は須恵器の壺底部の破片。南壁際の周溝より出土。底径8.6cmを測る。底部に回転糸切り痕を残し内外面共にナデ成形。酸化炎による焼成のため色調は乳茶褐色を呈し、軟質である。胎土には砂粒を含む。



第9図 第1号住居址出土土器実測図 (1/3)

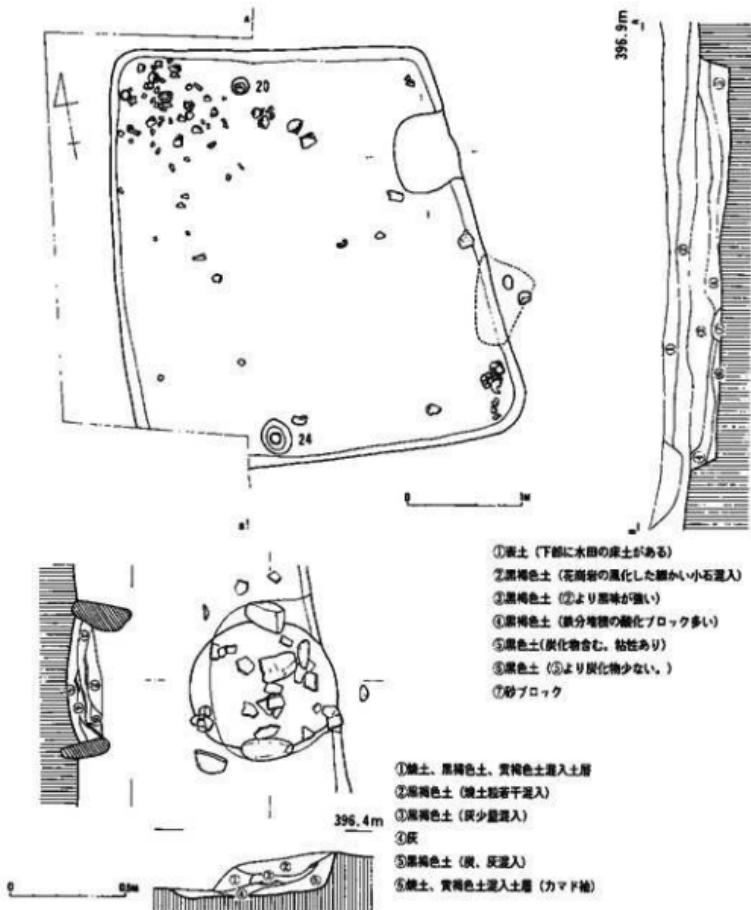


第10図 第1号土塙出土土器実測図 (1/3)

第3号住居址（第11図）

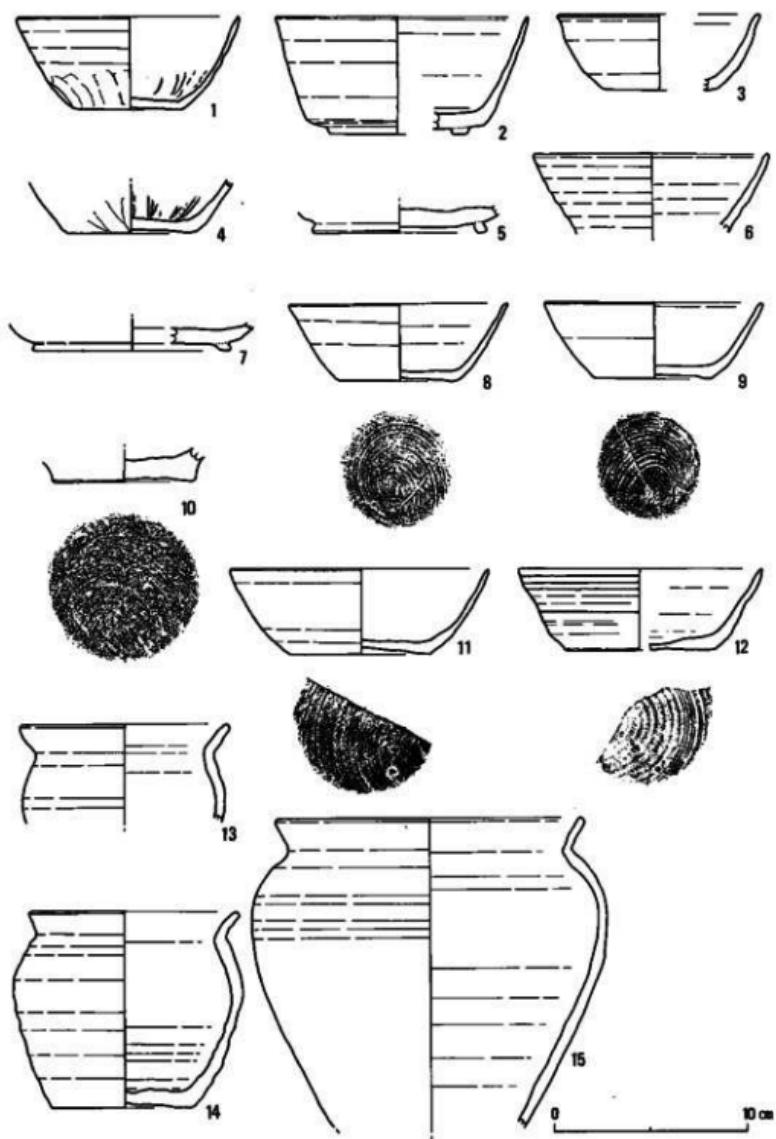
第2区のA—9区に位置する。西半分は調査地区外であったが、地権者（笠本嗣雄氏）の御好意により、全体の調査が可能になった。

南北3.5m、東西3.1mを測り、いびつな台形を呈する。壁の高さは、ほぼ35cmである。床面はなだらかに東向きに傾斜し、水分を多量に含み軟質である。周溝は認められない。北壁のはば中央部分、壁より22cmほどはなれたところに直径27.5cm、深さ20cmほどの柱穴があり、柱根（第21



第11図 第3号住居址実測図 (1/50, カマド1/25)

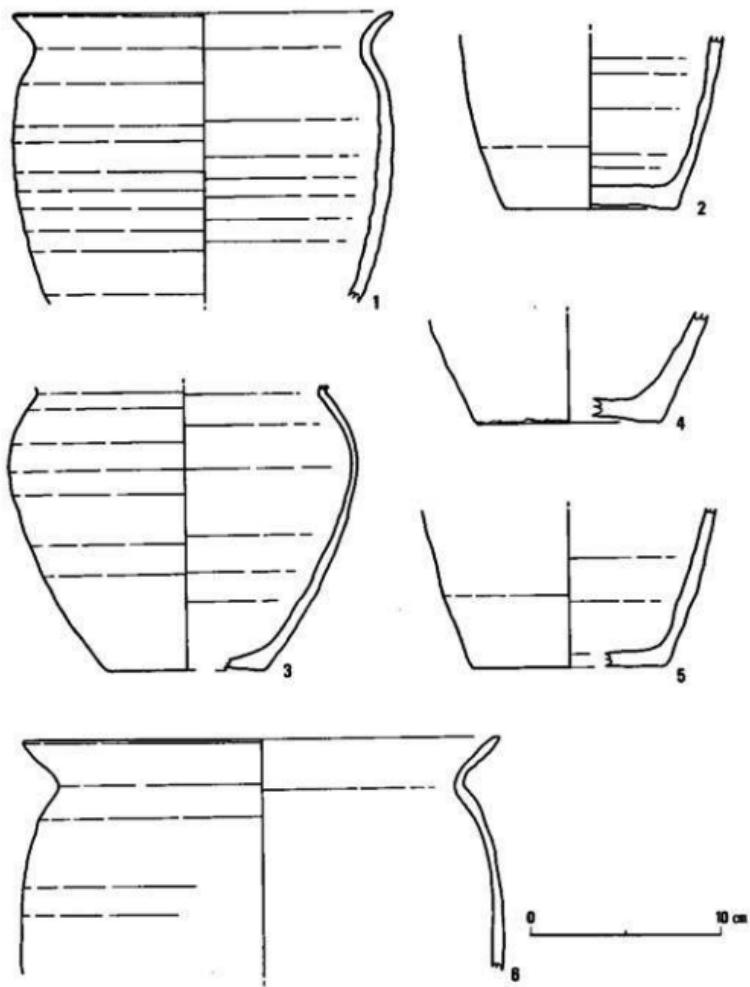
図-2) が残る。直径10cm、長さ32cmを測る。南壁のほぼ中央部分、壁より10cmほどはなれたところに直径28cm、深さ24cmほどの柱穴があり、柱根が認められた。柱根は、松らしい樹皮を残すのみで、実測図・写真などは残せなかった。住居の中央部からは置き柱(第21図-3)が検出された。底部にわずかに道具痕を残す、高さ10cmほどの小さなものであった。竈は東壁の北側に位置する。南北68cm、東西64cmの掘り方を持ち、焚口は45cmを測る。自然石を利用した袖石が両脇に立ったまま検出された。燃焼部及び焚口部には、多量の灰や炭が認められる。燃焼部から壺と甕の一部が出土している。この竈より北側に煙道らしいものが認められたが、竈の作り直しであ



第12図 第3号住居址出土土器実測図 (1/3)

ると考えられる。さらに、この竈の南よりに黄色粘土による高まりが認められた。粘土を剥がしていくと、甕の破片と焼土が検出でき、煙道も認められた。竈を廃棄した後、粘土を張り付けたものと考えられる。袖石などは取り除かれたらしく、認められなかった。この住居址の特徴として覆土中に遺物の多いことである。その遺物も須恵器を中心に住居の北西部に集中している。覆土は、壁際から床中央に向い傾斜して堆積しているが、この傾斜に沿った状態で遺物も出土している。

(出土遺物) (第12図) 1は甕の1/2の破片。竈より出土。口径11.4cm、高さ4.8cm、底径5.5cmを測る。口唇部は丸形。内面には暗文を、外面下部に斜めヘラ削りを施す。色調は乳茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。2は須恵器の甕の破片。高台径7.3cm、高さ6cm、口径13.3cmを測る。内外面ともに良く調整されている。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。3は須恵器の甕の破片。口径10.5cm、高さ3.9cm、底径5.4cmを測る。口唇部は、玉縁で外反する。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。4は甕の底部の破片。底径6.6cmを測る。内面には暗文を、外面下部に斜めヘラ削りを施す。底部には、回転糸切り痕を部分的に残す。色調は赤褐色を呈し、焼成・胎土ともに良好である。5は須恵器の甕の破片。底径9.1cmを測る。張り付け高台を有する。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。6は須恵器の甕の破片。口径12.2cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。7は須恵器の甕の破片。高台径10.3cmを測る。底部は回転糸切り痕を残し、張り付け高台を有する。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。8はほぼ完形の須恵器の甕。床面より出土する。口径11.6cm、高さ4cm、底径6.2cmを測る。口唇部は外反し、底部に回転糸切り痕を残す。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。9は須恵器の甕の破片。口径11.4cm、高さ4cm、底径6cmを測る。底部に糸切り痕を残す。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。10は變形土器の底部と思われる破片。底径7.4cmを測る。底部に回転糸切り痕を残す。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。11は須恵器の甕の破片。床面南東部より出土する。口径13.8cm高さ4.4cm、底径7.4cmを測る。底部に回転糸切り痕を残す。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。12は須恵器の甕の破片。口径12.8cm、高さ4.2cm、底径7.8cmを測る。底部に回転糸切り痕を残し、胴部中央部にくびれを持つ。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。13は、小型變形土器の破片。口縁部の1/4が床面より出土する。口径10.6cmを測る。色調は、外面赤褐色、内面は茶褐色を呈し、一部に煤が付着する。胎土・焼成ともに良好である。14は小型變形土器。床面より出土する。口径10.9cm、高さ10.2cm、胴部最大径12cm、底径7.3cmを測る。底部に回転糸切り痕を残すが、外部表面の剥落は激しい。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は軟弱である。15は變形土器の破片。床面南東部より出土する。口径は16cm、胴部最大径18.6cmを測る。口唇部は丸形で、肩部が張り、胴部上半部に丸みを持つ。内外面ともにロクロ痕をよく残す。色調は外面茶褐色、内面乳褐色を呈し、外面に煤の付着が認められる。胎土に1mm程度の砂粒を多量に含むが、焼成は良好である。(第13図) 1は變形土器の口縁部の破片。粘土を

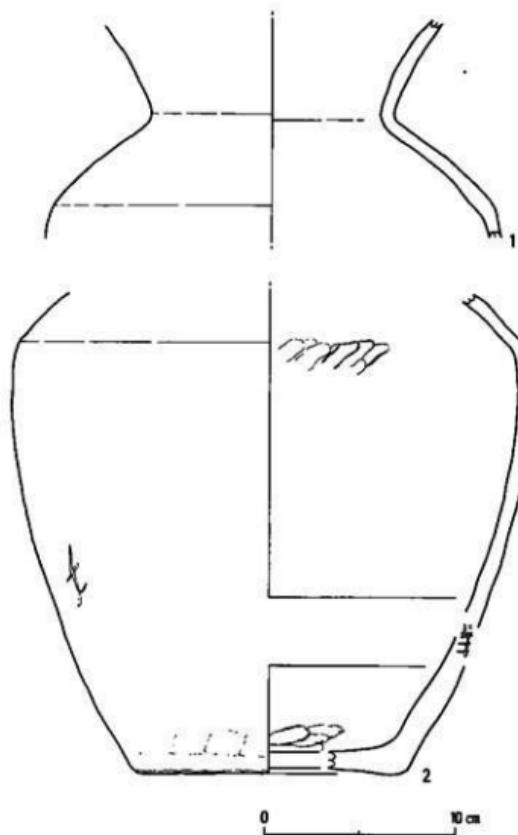


第13図 第3号住居址出土土器実測図 (1/3)

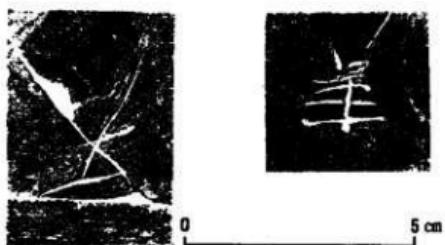
張り付けた腐棄された竈より出土する。口径20cm、胴部最大径20cmを測る。口唇部は丸形で肩部の張りは少ない。内外面ともにロクロ痕をよく残す。色調は乳褐色を呈し、胎土に1mm程度の砂粒を多く含むが、焼成は良好である。2は壺形土器の底部の破片。床面より出土する。底径8.9cmを測る。底部には回転糸切り、内外面ともにロクロ痕を残す。色調は灰褐色を呈し、胎土に1mm程度の砂粒を多量に含むが、焼成は良好である。3は壺形土器の底部の破片。竈の南わきから出土する。胴部最大径18.4cm、底径8.2cmを測る。

内外面ともにロクロ痕を残し、

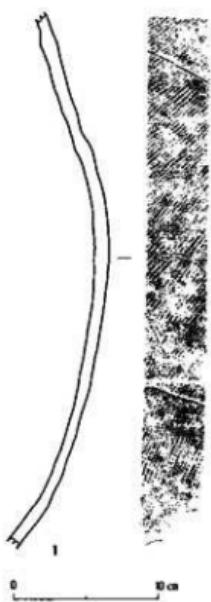
肩部はやや張っている。色調は灰褐色を呈し、胎土に1mm程度の砂粒を多量に含むが、焼成は良好である。4は壺の底部の破片。底径9.4cmを測る。底部に回転糸切り痕を残す。色調は茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好である。5は壺形土器



第14図-① 第3号住居址出土土器実測図 (1/3)



第14図-② 第3号住居址出土土器刻畫部分



第15図 第3号住居址出土
須恵器 (1/4)

2 土壤

第1号土壤 (第8図)

第3区のB—3区に位置する。第1号住居址を掘り込んで作られている。直径2mのほぼ円形のプランを持ち、底部も1.1mの円形である。深さ38cmを測り、西方向よりカマボコ形をした出入り口と思われる部分が90cmほど認められる。

(出土遺物) 第10図—1は須恵器の壺の口縁部片。口径22cmを測る。口縁部は曲線的に外傾し、自然釉が付着する。口唇部は肥厚して、特に外側端部は断面三角形の突帯状を呈する。

3 土器集中区

土器集中区4

第2区のA—10区に位置する。砂層上面に直径2m程のハート形を呈する黒色土が認められる。これを掘り下げたところ不規則な、凹凸の激しい凹地となつた。倒木痕ではないかと思われる。土器の底部1/2が出土している。

(出土土器) 第36図—17は壺の底部の破片。底径8cmを測る。内外面ともにロクロ痕を残す。色調は外面茶褐色、内面灰褐色を呈し、胎土に1mm程度の砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

器の底部の破片。住居南東部の隅より出土する。底径10cmを測る。底部に回転糸切り痕を、内外面ともにロクロ痕を残す。色調は黒褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好である。

6は壺の破片。電より出土する。口径25cm、胴部最大径25.3cmを測る。色調は乳褐色を呈し、胎土に1mm程度の砂粒を多く含むが、焼成は良好である。(第14図) 1は須恵器の壺の破片。よく調整されている。色調は青灰色を呈し、胎土に少量の砂粒を含むが、焼成は良好である。2は須恵器の壺の破片。胴部最大径26.5cm、底径13.6cmを測る。外面にはタタキメ、底部に指頭圧痕がわずかに認められる。胴部のほぼ中央に「士」と「羊」の刻書が認められる。二つの文字は、ほぼ表裏の関係に位置しているが「羊」については右側部分が大きく欠けているため、字の全体像は不明である。色調は青灰色を呈し、胎土に少量の砂粒を含むが、焼成は良好である。15図—1は須恵器の壺型土器の破片。外面にタタキメ。色調は青灰色を呈し、胎土に砂粒を含み、水ぶくれ状の膨らみがある。焼成は良好である。

4 その他の遺物

第2区の出土土器（第36図）

1は須恵器の蓋の破片。A—7区より出土する。蓋径14.8cmを測る。口唇部は外側に反る。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。2は須恵器の杯の底部、B—8区より出土する。高台径8.6cmを測る。底部に回転糸切り痕を残し、張り付け高台を有する。色調は青灰色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。3は須恵器の底部の破片。C—11区より出土する。高台径8.6cmを測る。張り付け高台を有する。色調は外面青灰色、内面赤灰色を呈す。胎土・焼成ともに良好である。4は須恵器の蓋のつまみ部分の破片。C—12区より出土する。つまみ径2.6cmを測る。色調は青灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。5は須恵器の杯の破片。A—7区より出土する。高台径8.1cmを測る。張り付け高台を有する。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。6は須恵器の杯の破片。C—11区より出土する。底径9.5cmを測る。底部に回転糸切り痕を残す。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。7は須恵器の杯の破片。B—11区より出土する。口径10.9cm、高さ4.6cm、高台径6.7cmを測る。底部中央に回転糸切り痕を残し、張り付け高台を有する。底部から直線的に口唇に立ち上がる。口唇部は丸形である。色調は青灰色を呈すが、口縁部には帯状に白色部分がある。胎土・焼成ともに良好である。12は須恵器の杯の1/4の破片。B—10より出土する。口径11.2cm、高さ4.2cm、底径6cmを測る。底部に回転糸切り痕を残す。口縁部はやや外反する。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

第3区の出土土器（第6図）

4は、口唇部を欠く杯の破片。高さ2.3cm、口径12.4cm、底径6cmを測る。口唇部は玉縁で外反、外面は回転ヘラ削り、底部は回転糸切り痕を残すヘラ削り調整を施す。内面はナデ。色調は乳褐色を呈す。胎土は密、焼成は良好である。

5は杯の1/4の破片。高さ4.4cm、口径11.6cm、底径5.6cmを測る、内黒土器である。磨耗が激しいが、丁寧に調整されていていることがうかがわれる。色調は灰褐色を呈す。胎土は密、焼成は良好である。

（丸山哲也）

第3節 戦国時代の遺構・遺物

1 建物群

第1号建物群（第16図・17図）

第1区A・B—3～8区に位置する。水田の床下の黒褐色土（砂）層を調査中、人頭大の石が検出され始めたため、付近をも精査したところ、密集した小礫や溝状の落込み等が確認された。但し、この地区は遺構検出面までの深さが余りなく、特に北側では地表下25～30cmしかなかったため、耕作等により擾乱されており、遺構の残存状況はよくなかった。しかし、部分的には、人頭大から拳大までの石が規則的に並ぶ箇所もあり、建物の礎石とも考えられた。又、それらを取囲んで小礫群が配されており、さらに全体を区画するかのように溝が確認できた。これらのことから、この一帯を建物跡とみなしたものである。

この1号建物群とした遺構は礎石状の石列・それらをとりまく礫群・溝・暗渠等から構成されている。しかし、これらの遺構には切合い関係が認められるものもあるとともに、建物も複数が存在していた可能性がある。建物については、6・7区にある礫群に囲まれたものを1号A、3～5区に石が疎らながら配されているものを1号Bとして、説明することとする。

① 1号建物群全体の概要

全体を区画するかのように、「コ」の字形の溝（1号溝）により取囲まれている。この溝の配列は、あくまでも発掘区内での状況であり、全体の様子は不明である。但し、地籍図（第3図）を見ると、この溝で囲まれた長方形の区画が、水田の区画にあてはまっていることが確認でき、現在の地割が戦国時代にまで遡ることが考えられる。この1号溝は平均幅50cm、南北の長さ約30mで、水の流れる方向は南→北である。この溝の西壁に沿って、暗渠が走っている。この暗渠は、一部が1号溝の壁を切っているとともに、一部は溝の覆土にも延びていることから、1号溝が埋没した後に構築されたことがわかる。この暗渠の石積みには臼杵片や五輪塔の地輪、「かくらさん」の軸受石などの石製品（第40図）が用いられており、館跡廃絶後の遺物が利用されたものと思われる。石積みの間や水路内に堆積した土中から、近世磁器片や瓦片が出土している。

1号溝に囲まれた空間内からは、建物に係わる礫群や礎石と思われる石が散乱しており、少なくとも2棟分は建てられていたとみられる。この石が発見された面を剥がし、下部を調査したところ、3号溝から西に続く溝が検出された（第17図3号B溝）。この3号溝は、A・Bとも1号A建物より古い時期のものと見なされる。

② 1号A建物

拳大以下の小石により構成される礫群により、区画された建物である。この礫群は、北辺および西辺の北端が擾乱されてはいるが、ほぼ「コ」の字形に配されている。規模は、幅30～50



第16図 第1号建物群実測図① (1/100)



第17図 第1号建物群実測図② (1/100)

cmで、東西約9mを測る。礫群の間から陶器片が3点ほど出土している。灰釉の皿破片、丸碗底部、備前系の擂鉢片などである(図版20)。礫群の下部には南北および西辺の一部では浅い溝が認められた。この礫群により囲まれた空間内に、建物の礎石と見られる石が散布していることから、これらの礫群は建物に伴う雨落ち施設の可能性が考えられる。但し、東辺は溝となつており、礫群はみられない。建物本体については、攪乱により礎石が動かされたり抜かれたりしており、詳細は不明であるが、石の分布状況からその規模は南北8m・東西3~4m程度とみられる。建物の向きは、1号溝の走る方向に一致する。

出土遺物

陶磁器類・土師質土器・古錢が出土している。

〔陶磁器〕

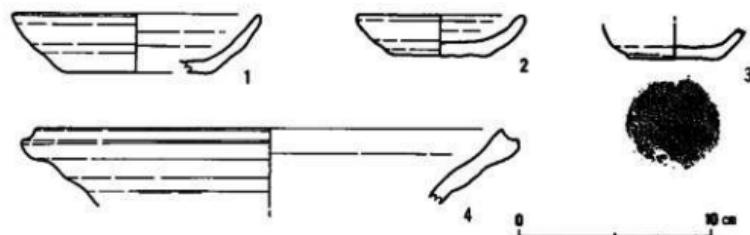
中国系磁器 12世紀代に位置付けられる白磁鉢片や12~14世紀代の青磁碗片がみられる(図版18)。劇花文、蓮弁文があり、同安窯系のもの等がみられる。青磁片は、ほかに暗渠中からも出土している。

国内產磁器 17世紀代に位置付けられる蛇の目高台の染め付け片がある。

〔陶 器〕

額戸・美濃系 先に述べたとおり礫群中から15世紀代に位置付けられる灰釉の皿・丸碗破片が出土した。また、16世紀中頃とされる天目茶碗片もみられる。

〔その他〕 備前系とされる擂鉢片がみられる。第18図1~3は土師質土器。1はB-8区黒褐色土から出土した5分の一程の破片である。口径12.8cm、底径7.8cmと推定される。器高3cmと深味があり、器壁もやや薄い。体部は湾曲気味に立ち上がる。淡褐色を呈し、胎土には金雲母を混入している。底部糸切り。2もB-8区から出土した4分の一程の破片。口径8.7cm、底径5.3cmと推定できる小皿である。全体に分厚く、浅い器形である。やや摩滅しておりザラつきがある。3は暗渠の脇から出土した小皿。口縁部を欠く、黒褐色を呈するものである。突出した底部で、器体は丸味を帯びながら立ち上がる。他にも小破片が数点出土しているが、図示し得なかった。4は床面を剥がし下部の状況を調査中に出土した捏ね鉢片である。口縁部の小破片で、瓦質のような胎土の、灰色を呈するものである。



第18図 第1号建物群出土土器実測図 (1/3)

また建物下部からは、15世紀代に位置付けられる瀬戸・美濃系天目茶碗の口縁部破片や備前系の播磨破片等が出土した（図版20）。

これら以外にも、「尾呂茶碗」等の近世陶器片や染め付け等の磁器片が出土した。

〔銭貨〕 建物の中央部やや南寄りのA—6区の黒色土中から2枚が出土した。表面が磨滅しており確認が難しいが、第34図1は「皇宋通宝」・2は「紹定通宝」であろう。

③ 1号B建物

1号A建物の南側に位置する。長さ15~25cm程度の石が散布している。南東部分に一部ながら石が規則的に配されており、建物の礎石と見なした。全体的には攪乱等により残存状況は悪く、石の配列は乱れている。石の分布範囲から見ると、南北14m、東西4.5m以上の建物跡と推測される。残存状況の良い箇所をみると、礎石の間隔は1.3~1.5mである。

出土遺物

〔陶磁器〕 中国系白磁片（図版18）。

〔石製品〕 砥石（第38図1）長方形を呈するが、よく使われており掠り減っている。

「かくらさん」の軸受石（第38図2）、井戸掘り等を行なう際の「かくらさん」と呼ぶ轆轤の回転軸を支える石と思われる。全体の6分の一程の破片。同様の完形品が、暗渠から出土している。石質は安山岩ないしデイサイト。

④ 溝

〔1号溝〕 建物群を「コ」の字形に囲む状況で確認された。発掘区内での規模は、東西約32m、南辺7m、北辺5mであるが、南辺と北辺とはさらに西側調査区外に延びており、館跡の1つの区画をなしていたものと考えられる。幅は30~80cmであるが、50cm程度が平均である。遺構検出面からの深さは、30~40cmを測り、底から壁にかけての断面形状は浅い「U」字状をなす。内部には砂層と黒色土層とが交互に堆積している（第16図）。北辺の溝は幅広く1m以上はあるが、現在の水路にかかっていることから、全貌をつかむことができなかった。しかし、水路および畦道際に杭列が走っていることが確認できた。明治27年の地籍図を参照すると、この部分に道路と水路が描かれており、道路と水田にかかる水路との境に打たれた杭列と思われる。従って、1号溝の北辺部は後世にも水路として利用されていたことが考えられる。実際、東辺との交わるコーナー付近から松の枝がまとまって発見されている。調査中は、夏場ということもあり出水量は多く、この溝が水路としての役割を果たしたことも事実である。

出土遺物

〔陶磁器〕 伊万里系とみられる染め付けの碗片等の磁器、瀬戸・美濃系の陶器片が数点出土した程度である。いずれも近世陶磁器であろう。

また、瀬戸・美濃系と思われる天目茶碗の破片3点がある。他に「尾呂茶碗」等の近世陶器が少量出土した。

〔その他〕 土師器や土師質土器については、磨滅した小破片が少量みられた程度である。

〔自然遺物〕カヤ・モモ・クルミ・ウメ等の種子がみられる（図版21・22）。

〔2号溝〕A-5・6区に位置する。1号A建物の西側にある雨落ち溝内側に検出された。長さ6.5m、幅40cm、深さ10~15cm程の溝である。内部には砂が堆積している。1号建物の方に向に準じており、この建物と関係のある施設であろう。出土遺物はない。

〔3号溝〕B・C-6・7区にて、1分溝に直交してその東側に発見された（3号A）。これは、幅70cm深さ30cm程の溝で、さらに東側調査区外に延びている。南辺には石が並んでいる。

1号A建物調査終了後、その下面を調査したところ溝が検出された。これは3号A溝につながることから、本来は1本であったと判断し、1号B溝とした。幅1~1.8m、長さ6mの北辺から、南に直角に折れ5m程で2号溝に行き当たっている。この箇所から始まる溝であろう。出土遺物 覆土中から内耳土器の破片や土師質土器、平安時代の須恵器・土師器等が出土した。内耳土器を除き磨滅が激しい。

第40図3 茶臼の下臼片である。二分の一程の破片であるが、受け皿を伴なっており、目は八文曲7ないし8溝であることが分かる。溝は縁まで達している。石質は安山岩である。

⑤ 暗渠

かつてこの地域一体は湿田であったとされており、暗渠を構築しないと水田の作業に支障をきたしたとのことである。特に、徳島堰の開削された17世紀中頃以降は出水が激しくなったと思われる。その影響であろうか、発掘区においても縦横に暗渠が設けられていた。ここでは、構造のよくわかる3基を図示しておいた。

〔1号暗渠〕1号建物群の北側に、東西方向に走っている。構造は2号同様、側石と蓋石とから成る。但し、西側は地表から浅いため擾乱が激しく、部分的にしか残っていない。西から東に向けて流れるが、2号と交差するすぐ手前で1段落ちて、そのまま東に下っている。この段差がつく箇所は、ちょうど1号溝の西壁の落ち際に当たっており、このラインが水田の境（畦畔の東端）であったと考えられる。1号暗渠はさらに調査区外に延びているが、途中で3号暗渠に切られている。

〔2号暗渠〕1号溝の西壁に平行し、大半はその壁を切り、一部は覆土に落ち込むかのような状況で検出された。1号溝が廃棄され埋没した段階で構築されたものであろう。構造は、まず幅20cm程の溝が掘られ、次いで側石を両側に立て水路とし（第17図2）さらに蓋石をのせたものである（17図1）。蓋石には石臼（第39図2）、側石には五輪塔の地輪（第41図3）等が用いられている。石臼は上臼の二分の一程の破片で、挽き木用の長方形の孔が穿たれている。臼面は非常に磨滅している。

北側で1号暗渠と交差して、さらに北に延びている。側石の並び状況からみて、1号暗渠との時期差はほとんどないと思われる。水は南から北に向けて流れるとみられるが、1号溝の覆土中に作られている部分は、地盤が沈下しており、ある時期からは機能を果たしていなかったと思われる。石の間から近世磁器（染め付け片）や瓦片が出土している。

〔3号暗渠〕3号暗渠は1号よりも深い箇所に作られており、B-3・4区など、南側から

延びて来ており、2号暗渠もこれにより切られている。B—3区からB—7区まで通して走っていることから、2枚の水田が1枚に造成された後に構築（明治後半以降）された暗渠であろう。構造については、1号・2号に共通するが幅は30~40cmと大型で、側石も大きい。蓋石の上には拳大の石を詰め、さらに小石や砂利を充填している。写真からはこの砂利の層が直線的に続いているのが分かる（図版2・3）。これについては全体の図示は行なわなかった。出土遺物なし。

〔その他の暗渠からの出土遺物〕

第39図1 C—3区暗渠から出土した石臼の上部である。上面は縁取りされており、方形の供給口がみられる。目は六分画であるが均等ではない。

第40図1 B—1~3区には暗渠が縦横に走っていた。このうち、1号溝南辺も暗渠で寸断されていたが、この溝内の暗渠の一部とみられる部分から出土したのが、図示した石製品である。宮下区の長田勉氏によると、かつて井戸掘りを行なう際にもちいた「シャチ」という、土の入った籠を引き上げる巻き上機の回転軸を支える「軸受石」によく似ているとのことであった。船や樹木を曳くのに用いる「紐引き轆轤」について、広辞苑には「かくらさん」と記載されていることから、ここではこの石製品を「かくらさん」の軸受石として報告する。石質は安山岩ないしデイサイトである。一見容器のようであるが、内面は擂鉢状に落ち込んでおり、底面もやや窪み、中央部が貫通している。この内面は、回転により形成されたような磨滅状況である。二つに割れていたが接合したものである。正位に置くと、非常に安定が良い。

（参考資料）第40図2は蓮崎市藤井町にて採集されたという石製品である。これも形態的に「軸受石」とみられるものである。1に比べて内面の窪みが小さく浅いのは、使い込みが若いからであろう。底面は平坦で、中央部が窪んでいるのは安定のためであろうか。石質は1と同様、安山岩あるいはデイサイトである。

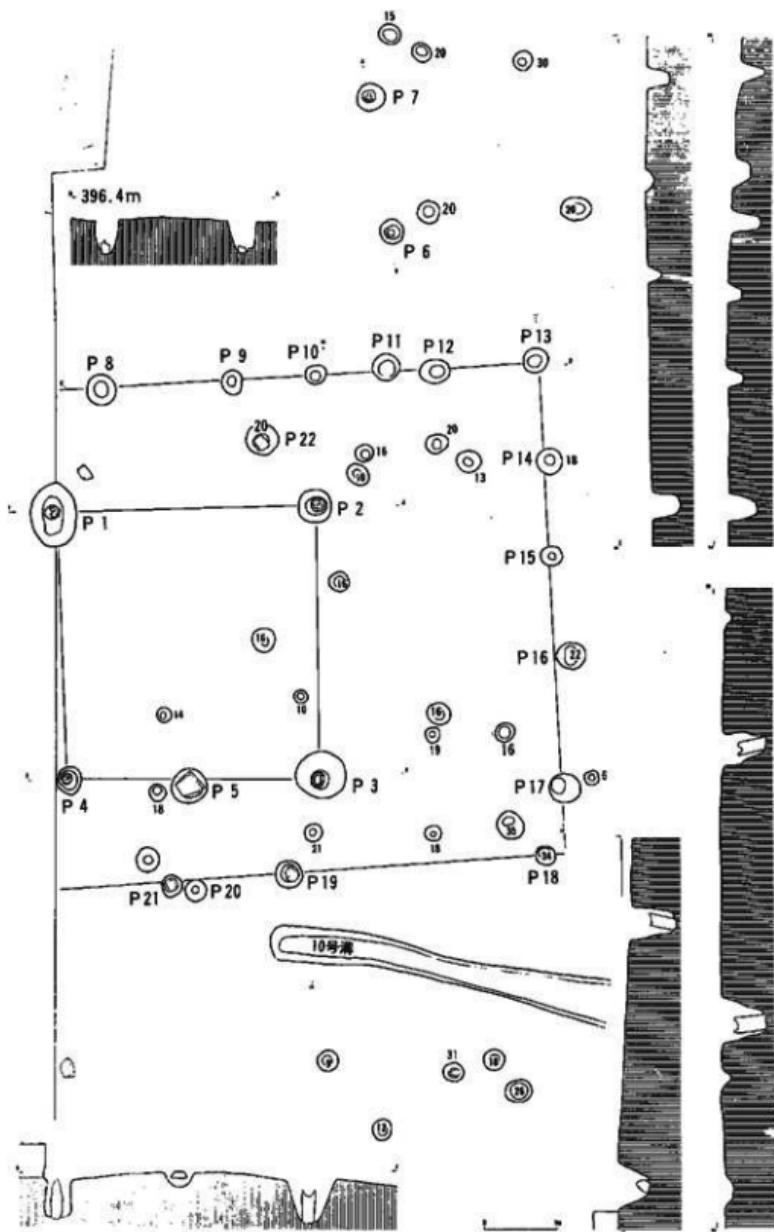
第41図1 C—3区暗渠に利用されていた宝鏡院塔の相輪部破片である。永く水に浸っていたらしく、酸化鉄の付着が著しい。4も同地区から出土した五輪塔の地輪である。

第2号建物群（第19図）（図版5）

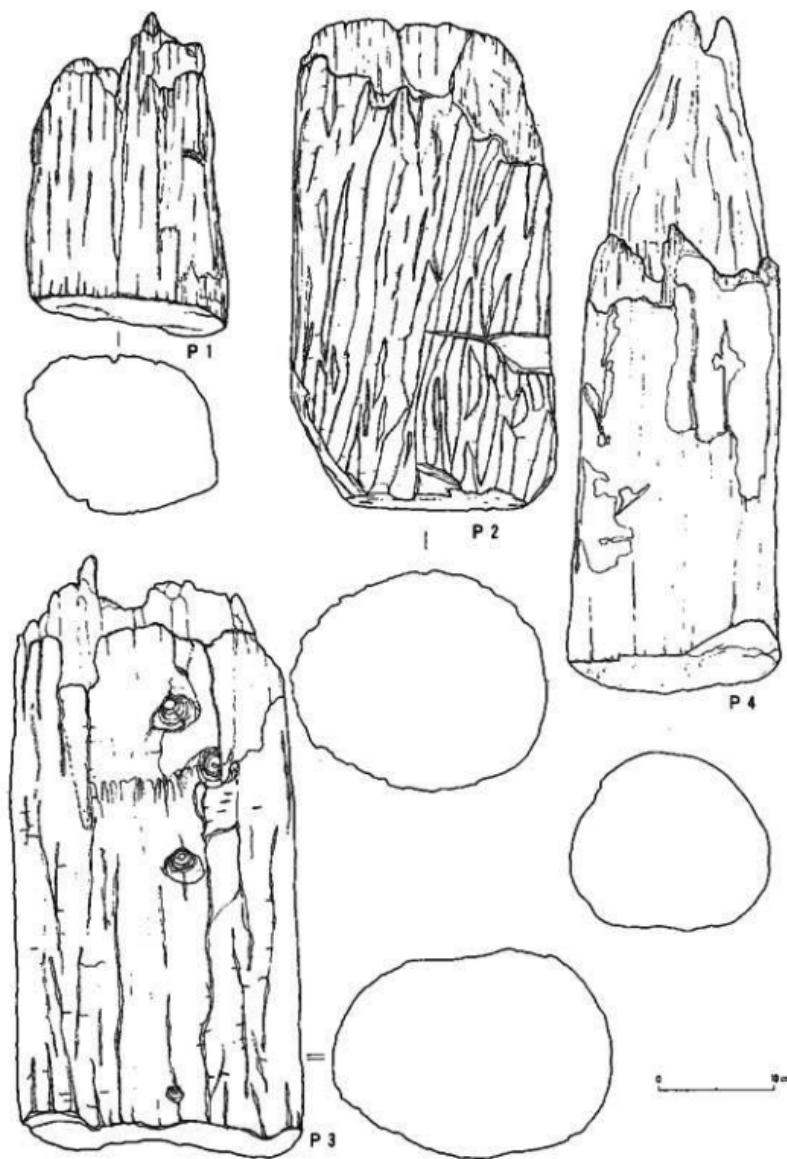
第2区A・B—8~10にて、砂砾層を掘り込んで小穴が多数発見された。このなかには柱根が残っているものもあり、幾つかの建物あるいは建物を取り巻く施設が所在したものと考えられる。但し柱根のあるものを除き、これらの配列については不明瞭であることから、建物群として取り扱った。

〔概要〕

40個余りの小穴が検出された。このうち、P1~P4内には柱根が残っており配列からみても1棟の建物と見なすことができる。これを2号建物としておく。ただし、この建物は発掘区外にも延びている可能性もあり、全体の様子は不明である。この2号建物を取り囲むかのように、P8~P21が並んでいる。このうち、P19・21には平石が入っている。これらの小穴が別の建物に伴なうものなのか、あるいは2号建物の付属施設なのかは検討を要する。しかし、



第19図 第2号建物群実測図 (1/80)



第20図 柱根実測図① (1/5)

P 8～P 21を含む周囲の小穴は、2号建物の柱穴に比べ、小さくしかも浅いことに注目した場合、建物の付属施設あるいは塀等の区画施設の可能性を考慮する必要があろう。

また、P 6・P 7にも柱根が見られる。この柱穴は、2号に比べて小さく、柱根も小型であることから、別の建物ないし施設と思われる。本建物群の南端には溝が走っている。これを10号溝とした。こ

の南側にも小穴が5個検出されたが、配列は不規則である。内1個に石が入っている。出土遺物については、A・B—7～9区全体の黒褐色土中より平安時代から中世の土師器・須恵器・土師質土器等の破片が出土しているが、P 1内から土師質土器（第36図9）や内耳土器破片が出土しており、これが建物の時期を決定する遺物である。

〔規模〕

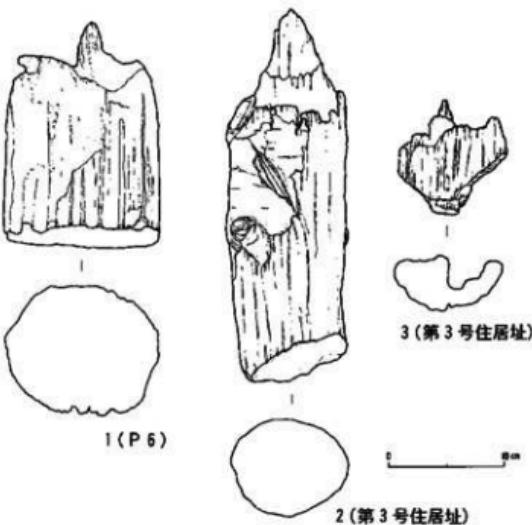
2号建物 P 1～P 4のそれぞれの柱穴間について、芯から芯までの長さは、P 1・P 2間3.7m、P 2・P 3間3.75m、P 3・P 4間3.5m、P 4・P 5間3.7mである。1間3.7mが基本となっている。さらに、P 3とP 4の中間に平石を持つP 5がある。この4本だけが主柱とすれば、一辺が3.7mの建物となるが、P 1とP 4は発掘区の際に位置しており、調査区外の状況がつかめないことから、全体の規模は不明である。

P 8～P 21は「ヨ」の字形に展開しているが、その規模は南北6.8m、東西6m以上を測る。2号建物の柱穴が、深さ40～60cmを測るのに対して、周囲の穴は小さく浅い。

〔柱根〕（第20・21図）

P 1～P 4に見られるが、P 4のものがほぼ直立していた他は、3本とも南東方向に傾いていた。いずれも底面は平坦に切られており、樹皮が付いたままの材が用いられている。「クリ」材と思われる。

他に、P 6・P 7にも木材が残っていた。これらは上記のものと比較して小さく、樹皮も認



第21図 柱根実測図② (1/5)

められなかった。P 6 は第21図に示したが、P 7 のものは取り上げ不可能であった。

〔出土土器〕

第36図9 柱穴P 1 内から出土した土師質土器である。2分の一の破片。口径13.8cm、底径7.5cmと推定されるものである。底径は口径の54%と比較的広い。器体の立ち上がりはゆるく、口縁が開く感じである。器高2.1cmと低い。胎土中に金雲母片を多く混入する。底部糸切り。

他に、同じ柱穴から内耳土器の破片が3点出土している。

〔10号溝〕

2号建物群の南側に位置する。A—8区から始まり東に走るが、途中から傾きの段差により消滅している。幅40~60cm、深さ10~15cmを測る。内部には砂が堆積していた。出土遺物なし。

2 住居址

第2号住居址（第22図）

〔概要〕 第2区A—5・6区に位置する。黒褐色土を徐々に掘り下げていったところ、内耳土器が潰れた状態で発見されるとともに、土師質土器や石製品等も出土し始めた。黒褐色土を剥がしてしまつと、黄褐色砂層に至り、この面で柱穴等の小穴が検出された。柱根の出土した小穴もあり、遺物の出土状況とも合せて住居と見なした。この構造は、砂層への掘り込みは殆どなく、平地式の住居と思われる。遺物は、地山である砂層から5~10cm浮いた状態で出土しており、この砂層あるいは、砂層上の黒褐色土面が土間として用いられていたことが考えられる。

なお、北側には浅い溝（第9号溝）が東西方向に走っており、本址の北辺はこの溝により切られている。

〔規模〕 南北5.7mを測る。東西方向については、西側調査区外に延びていることから完全に調査はできなかった。調査できた範囲内での規模は3.6mである。

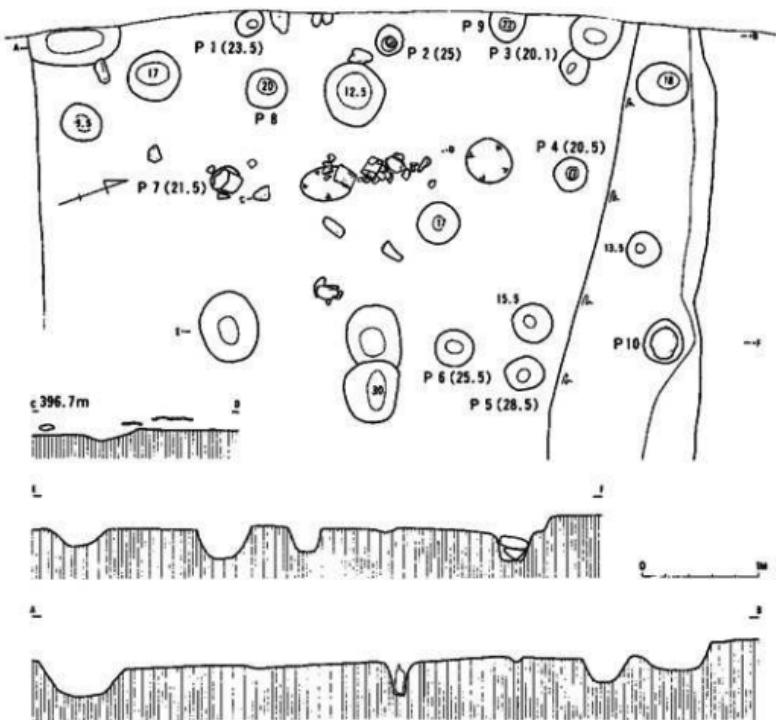
〔形状〕 掘り込みが確認されないためプランは不明であるが、小穴の配列からは方形を基調としたように見られる。

〔床面〕 遺物の出土状況から、砂層およびその直上の黒褐色土面が生活面と見られるが、特に堅緻ではなかった。

〔柱穴〕 20数個の小穴が検出されたが、このうちどれが柱穴であるかは検討を要する。柱根の残っていたP 2 は直徑25cm、深さ26cmであり、これを基準に同様の規模の小穴を選んでみると、P 1 ~ P 9 が該当する。これらを結ぶと、南東コーナーには該当する小穴が見当たらないものの、一辺が2.5m程の方形規模に配列することが確認できる。これを、住居の主柱穴と考えることもできよう。P 9 や、根石の入っていたP 10などのように、さらに外側にも柱穴がみられることから、住居の範囲は主柱列よりも広いものであろう。

P 9 内からは、灰釉丸皿（第23図1）が出土した。また、P 4 内には小石が入っており、P 7 では偏平な石が被さっていた。P 10の根石は二つ重なっている。

〔その他〕 住居中央部から内耳土器が一括して出土したが、その下部に浅い落ち込みが確



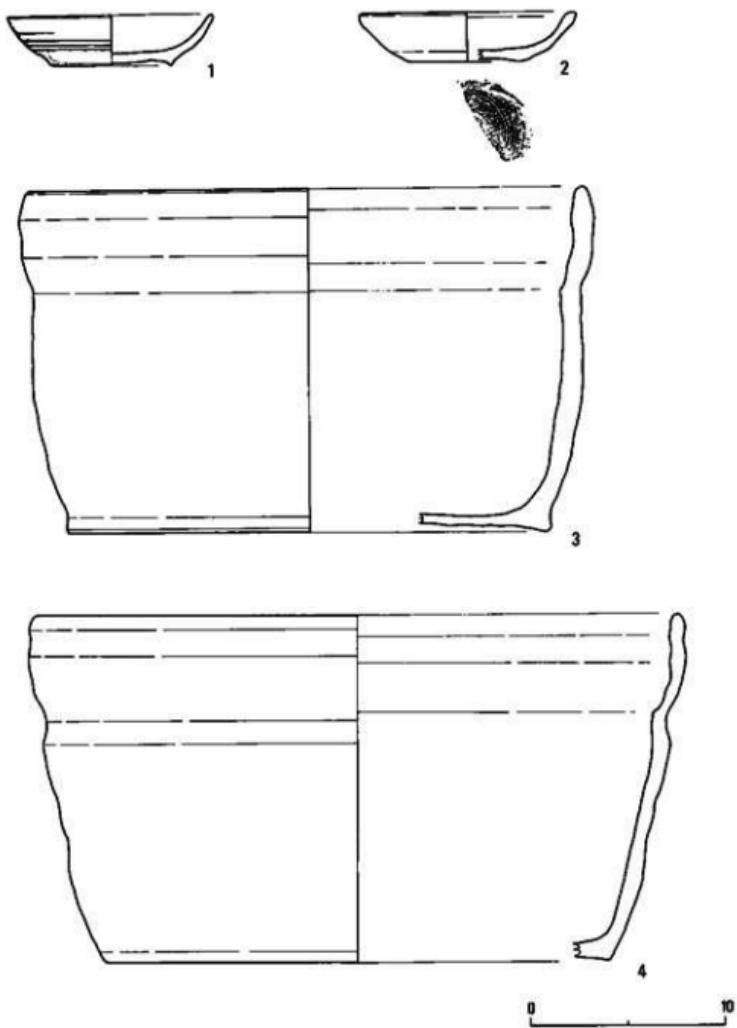
第22図 第2号住居址実測図(1/50)

認された。炉に類する施設かと考えたが、焼土や灰等は認められなかった。

出土遺物(第23図・第37図)

第23図1 P9内より出土した丸皿である。3分の1程を欠損する。灰釉の施された瀬戸・美濃系陶器で、大正元年の16世紀中頃に位置づけられるものである。

2は住居中央部から内耳土器とともに出土した土師質土器。口径11cm、底径5.9cmと推定復元できる、3分の1程の破片である。体部外面中央がややふくらむ。内面側では口縁が短く、立ち気味である。白味のある淡褐色を呈する。3・4は住居中央部から出土した内耳土器である。当初1個体とみていたが、2個体であることが分った。3は3分の1程の破片。4は2分の1程の破片であるが底部は僅かしか残っていない。いずれも推定復元であるが、4のほうが薄手で大形である。耳は確認できなかったが、4では内面のくびれ部直下に若干の盛り上がりが認められることから、この部分に耳が付いていたと思われる。残念ながらこの箇所の口縁部を欠いているため確定はできない。第37図2~4 長円形の小石である。大きさが揃っており、筵編み用の鍼ではなかろうか。なお、1は1区での採集品である。



第23図 第2号住居址出土土器実測図 (1/3)

3 石列遺構（第24図）（図版9）

第2区のA・B—1区にて2種類の石列が発見された。1基は水田区画の境界に沿って、「L」字状に延びている。これを1号石列とする。この1号の北側から、東西に直線的に走る短い石列が発見されている。これを2号石列とした。調査中、この地区は出水が激しかった。

【1号石列】南北3.5m東西6mの長さで「L」字状に延びる石列である。途中、石がとぎれる箇所があるが、本来はつながっていたものであろう。大部分の箇所では、石は一段であるが、東端では2~3段積まれている。積み方は乱雑で、石積みが崩れたかのような状況であった。この石積みの中に、五輪塔の地輪と火輪が含まれていた（第24図平面図のスクリーン・トン部分）。土器の基底部の可能性も考えて調査したが、これ以上の石列の広がりは確認できず、また堅く叩き締められた箇所も見あたらなかった。

出土遺物（第25図、第41図）

土師質土器 第25図2は東端石群周辺から出土したもの。1分の1程の破片。直径7cm余りの小型品で、精緻な作りである。外面の体部中央がやや肥厚する。周辺からは小破片が数点出土している。

陶器 地輪の際から志野系皿の底部付近の破片が出土（図版19-4）。また、西側の石列と小穴P1との間から、古瀬戸碗の破片が出土した（図版19-6）。

石製品（第41図2・5） 五輪塔の地輪（5）・火輪（2）が1点づつ出土。地輪の四側面には墨書きが認められる。三面には「佛」、一面には「佛」を中心に、向かって左に「菩提」、右に「為靈」と書かれている（図版28）。

漆器 第25図5は、石列の南コーナーから出土した漆塗り椀の高台部である。

その他 第25図1は周辺部から出土した須恵器の1分の1の破片である。

【2号石列】1号石列の北に位置する。石が揃っているのは長さ2.5m程度であるが、西側にも石が散在する。石列と平行に幅60~70cm、深さ10~15cmの浅い溝が西から東に向かって走っている。この溝は、石列の下にも入り込んでおり、両者は一体となっていたものと思われる。溝の落ち込みが確認できた範囲は、長さ5.5m程度であり、他は不明であった。この溝は途中から別れ、1号石列の下部に向かっている。石列を構成する石は1段であるが、偏平で安定の良いものが用いられている。石列間や溝から上師質土器、石製品、礫み物、炭化物等が出土した。

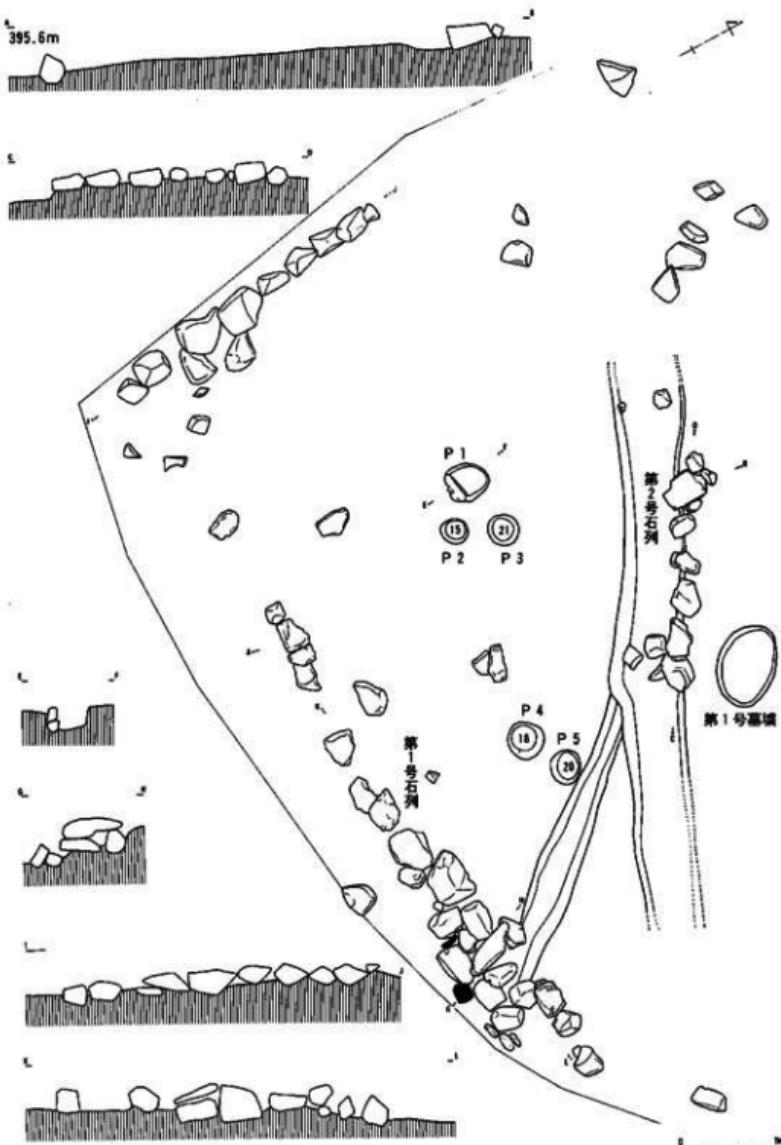
1号石列と2号石列との間には、小穴が5個検出された。規則的に配列するものではないが、P1の壁際には石が2段積まれていた。

なお2号石列のすぐ北側には、1号墓壙が発見されている。

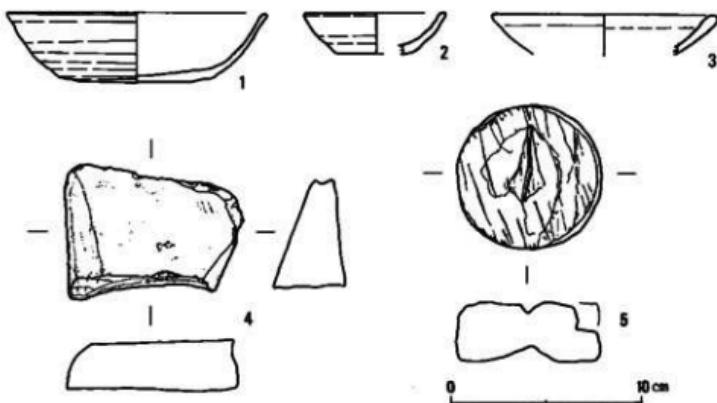
出土遺物（第25図、第38図）

土師質土器 第25図3は、石と溝の間より出土した3分の一程の破片。口径11.5cmと推される。口唇がやや肥厚する。白味のある淡褐色である。

石製品 第38図3は安山岩製の「ヒデバチ」とみられる破片である。内面は煤により黒く変色している。第25図4は石列の間から出土したもので、平面および側面が磨滅し、擦痕が走る。



第24図 第1・2号石列・第1号墓塚実測図 (1/60)



第25図 第1・2号石列出土遺物実測図 (1/3)

砥石の破片であろう。

編み物 溝の石列際から、ザル状に編まれたアンペラ片が出土した。取り上げたが、非常に脆く破損してしまった(図版25)。また、繊や藁状の炭化物もみられた。

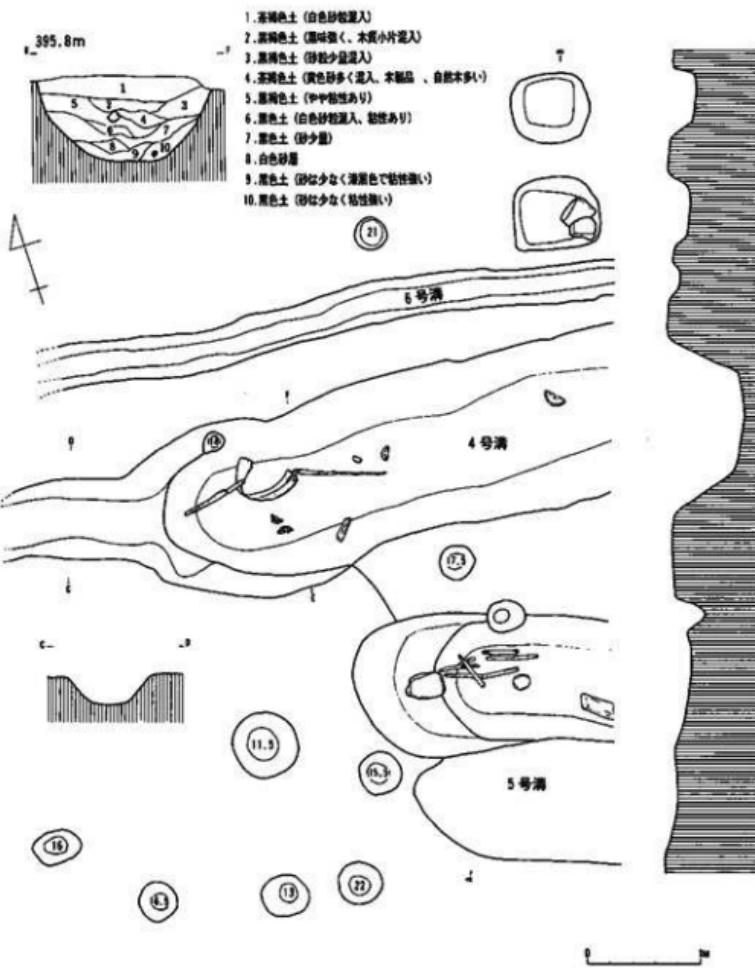
4 溝

溝は10本が発見された。このうち1号から3号、10号については、他の遺構とともに発見されたことから、それぞれの遺構の項すでに報告した。ここではそれら以外の溝について記述する。

第4号溝(第26図)(図版7・8)

B-4区にて砂層面に黒色の落ち込みが検出されたことから、付近を精査したところ東西に延びる溝状の遺構であることが確認された。南側には5号溝、北側には6号溝がある。

4号溝は、発掘区を横切るかたちで西から東に走っており、さらに調査区外に延びている。溝の西側部分は検出できなかった。確認された範囲内での溝の規模は、西側部分が幅70cm、深さ25cmと小規模であるが、途中から幅1.8~1.9mと広く、深さも65cmと深くなる。この深くなつた溝の部分から木製品・自然木・種子類等が出土しており、排水路の水溜状の箇所を調査したものと思われる。断面形状は「U」字形を呈する。覆土の状況は、10層程に分層できるが、最下部には粘性の強い黒褐色土がみられ、さらに砂層や黒褐色土・茶褐色土が交互に堆積している。第2層以下には植物質が含まれているが、特に覆土中位の第4層からは木製品の出土が目立った。また、最下層の10層からも出土している。調査途中から出水が激しかった。

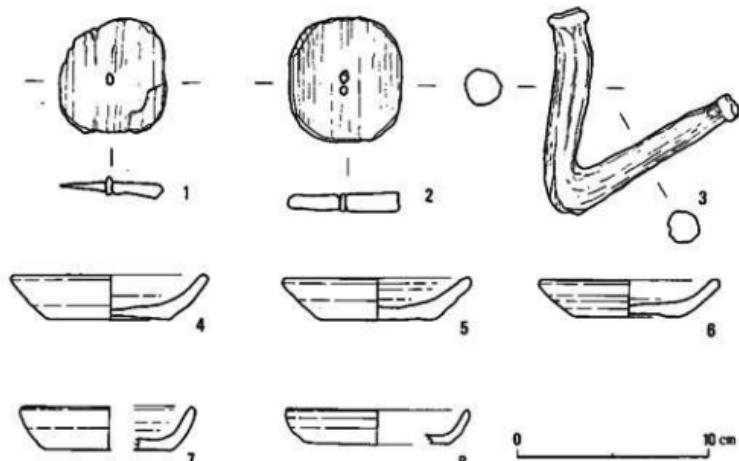


第26図 第4・5・6号溝実測図 (1/50)

〔出土遺物〕

土師質土器 (第27図4~6)

4は口径10cm、底径6.4cmと推定復元できる4分の一程の破片。底径は口径の64%と、底径が広い比率である。体部は、段もつかずゆるやかに湾曲しながら立ちあがる。金雲母を混入する。5は3分の一の破片で、口径9.8cm、底径5.1cmと復元できる。内面には煤が付着し、黒く変色している。器壁はやや厚く、体部中央がやや肥厚する。底部平坦であるが、内面中央はや



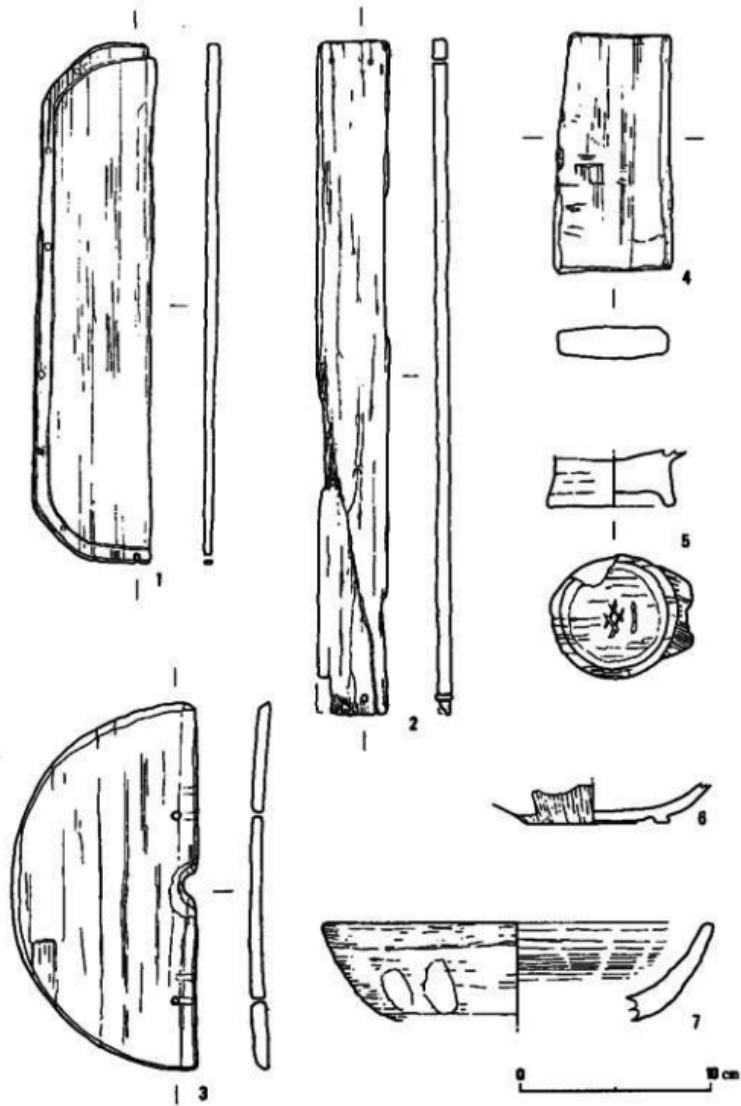
第27図 第4・6号溝出土遺物実測図 (1/3)

や窪む。底径は口径のはば2分の一である。6は口径9.3cm、底径5.5cmと推測される4分の一破片である。4・5に比してやや扁平な器形である。体部中央がふくらむ。3点とも底部には糸切りが明瞭。4・5の胎土には金雲母が多い。

他に、内耳土器の破片が多く出土している。

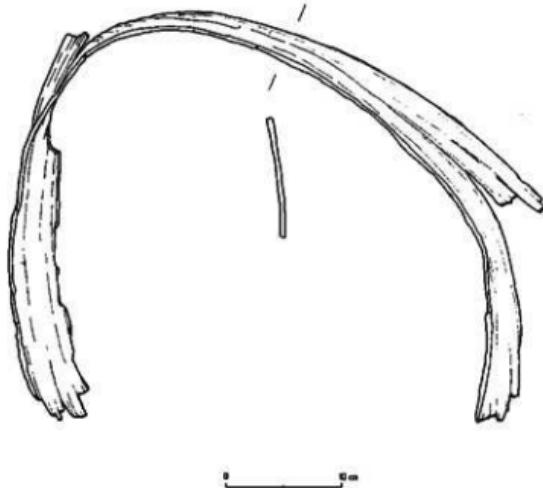
木製品 (第27図～第29図)

第27図1・2は隅円方形状に面取りされた、円盤状の製品。中央部に貫通孔があり、中に竹あるいは木の芯が残っている。つまみを付ければ蓋、脚を取り付ければ台になろう。3は覆土下部の黒色土から出土した、「自在鉤」と思われる木製品である。「V」字形の基部が僅かにくびれ、磨減しており、紐等を巻き付けたことがわかる。第28図1は折敷の底板と思われる。周縁が1段低く削られており、その部分に孔が貫通し、木ないし竹釘が残っている箇所も認められる。溝の南壁際の深さ40cmの箇所から出土している。2は箱物の側板である。両端に2孔づつ貫通しており、一部には経じるのに用いた桟の皮が残っている。3は鍋など煮沸具の蓋であろう。表裏ともに炭化物が付着しており、吹きこぼれたものであろう。2枚合わせの蓋の1枚であり、合わせ目の断面部分には、2個1対の孔が2カ所に認められ、竹釘等で2枚を繋ぎ合わせたことが考えられる。また、平面にも対称的に2孔が貫通していることから、紐などで繋いだものと思われる。中央部には直径1cm程の穴がある。周囲が磨減しており、紐を差し込み「つまみ」としたのであろう。溝の東端の、30cmの深さから出土した。4は板状の木片であるが、側面は角が削り落とされており、表裏面にも削り痕が認められるが、使い込んだように磨減している。溝中央部の深さ50cmから出土した。5は塗りの椀の高台部である。全体に黒



第28図 第4号溝出土木製品実測図 (1/3)

漆が塗られており、高台部内面には黒漆の地に「泰」と朱漆で書かれている。6は漆塗りの皿とみられる底部を中心とした破片。内面に赤と黒の漆が僅かに残っている。5・6とも、30cm程掘り下げた箇所から隣接して出土したものである。7は楕円形の木製品である。溝中央部の、深さ30cmの地点から出土した。全体の3分の一程の破片で、木地のままである。第29図は曲物の破片である。直径40~50cm



第29図 第4号溝出土曲物実測図 (1/5)

と推測される、比較的大型の曲物であろう。覆土下部の50cmの深さから出土したものである。桜皮(図版23-2)

桜の皮の巻き上げられたものが10数点出土した。長さ2~12cm程度のもので、幅7mm~1.2cm程の間隔で切り込みが入っているものもある。また、巻き上げの中心に細い木の軸が用いられていたものも見られた。曲物を縫じるのに用いられたものであろう。このような状態で採取・保管し、必要に応じて裁断し縫じ紐として使用したものと思われる。

種子等(図版22・23)

溝内に堆積した土壤について、特に4層以下をピックアップして水洗した。その結果、クリ、クルミ等の堅実類、モモ、ウメ、チャ等の種子、アサの実とみられる種子、炭化米、それに「カラタチ」と思われる棘のある小枝や、松の結実(まつかさ)が検出された。

第5号溝(第26図)

第4号溝の南50cmに位置する。幅1~1.2mを測るが、深さは15cmと浅い。長さ2m余りが調査されたにすぎず、大半は東側調査区外に延びているものと思われる。南側の壁に沿って浅い窪みが走っている。底面に接して、漆塗りの楕円形の木製品が出土したが、保存状態が悪く、また小破片のため図示できなかった。他に自然木(枝)が出土した。

第6号溝（第26図）

第4号溝に沿って、その北側に走っている。幅40cm、深さ10cm程度の細い溝である。長さ5m程が確認されたが、さらに調査区外に延びている。覆土中より土師質土器2片が出土した。第27図7は3分の一程の破片である。口径8.9cm、底径6.7cmと口径に比較して底径が広く、器壁の立ち上がりも急である。体部外面中央はややふくらむ。胎土には砂粒が多く、堅い感じである。外面は黒褐色、内面黒色を呈する。底部糸切り、8も口徑9.5cm、底径7.5cmと推定される、底径の大きい器形である。3分の一程の破片。7よりも器壁が薄く、器高も低い。胎土は7と同様で、長石や輝石と思われる粒子を混入している。

小穴群（第26図）

第4号・5号・6号溝の周辺に10個余りの小穴が確認された。直径30~40cm、深さ10~20cmのものであるが、特に規則的に並ぶ状況ではない。ただし、第6号溝の北側に発見された2個は、70×60cm程の隅円方形を呈する大型のものである。2個が並んで位置している。

第7号溝（第4図）

第3区のB-10~11区にて「L」字状に延びる溝が発見された。付近には、弥生土器が集中して出土しているが、溝の確認面はこれよりも上層であり、時期は戦国期以降と思われる。溝内からの遺物はないが、試掘の際にこの付近から瀬戸・美濃系の天目茶碗破片が出土した。幅15~30cm、深さ10~15cmの狭い溝である。東側は1段下がった水田により削平されてしまっている。

第8号溝（第30図）

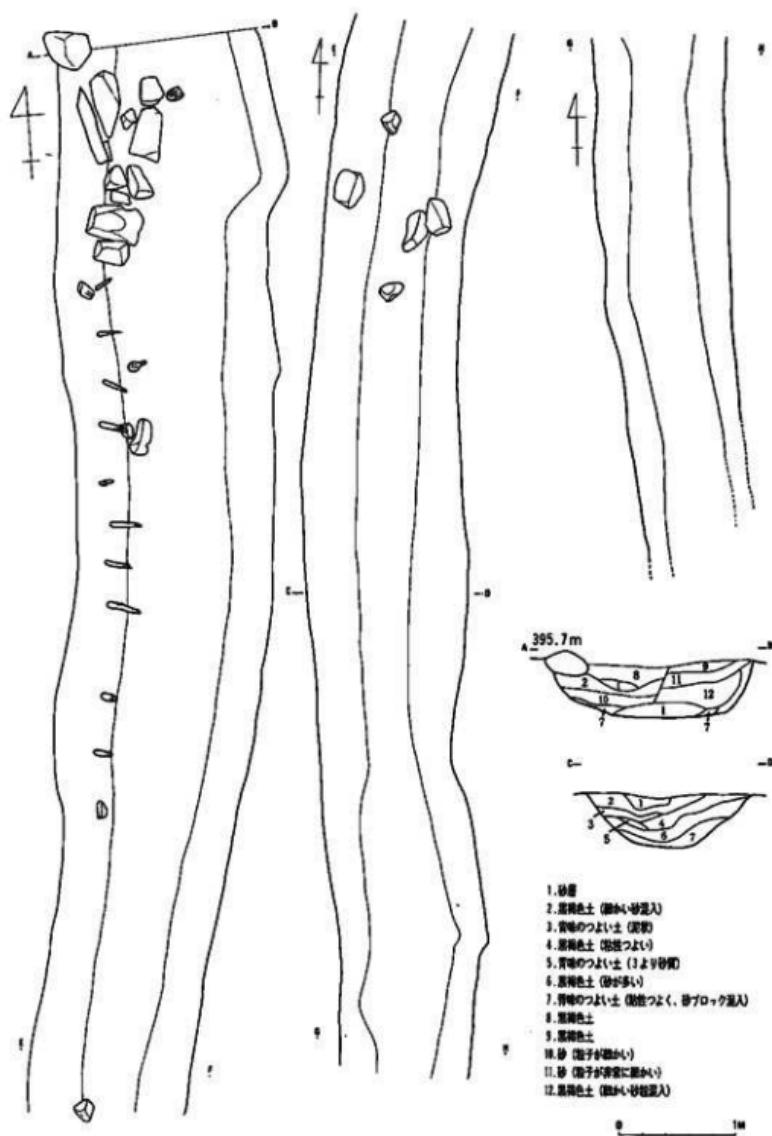
第1区の北側部分の、A・B-10~13区にて発見された。幅1.0~1.8m、深さ45~50cmを測る溝で、北から南に向かって走っている。長さ22m程が確認されたが、さらに南方向に走っており、第3号溝と合流することも考えられる。

覆土中には砂層や黒褐色土が交互に堆積しており、溝幅や深さが変化しながら機能していたことがわかる。特に溝の北側では土層断面図からみて、当初の溝がある程度埋まった段階で、新たに細い溝が掘られたことが分かる。明治27年作製の地籍図（第3図）には、この溝の箇所と思われる付近に水路が走っており、後世までこの溝が機能していた可能性がある。西壁に杭が並んでいるが、明治期以降の水路に伴うものかもしれない。

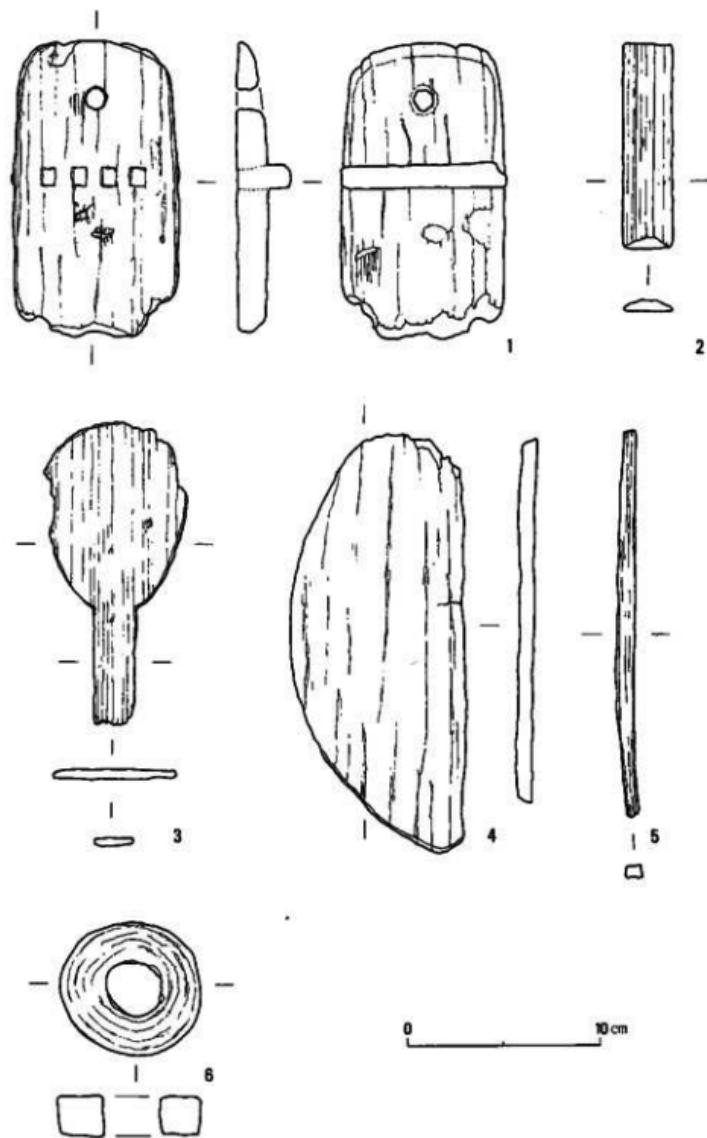
覆土中や底面付近から、伊万里系染め付けなどの近世磁器や木製品が出土した。溝の時期は近世以降と思われるが、戦国期にまで遡れるかは不明である。

木製品（第31図）

1は溝北端から出土した「下駄」である。底面から10cm程浮いた状態で出土ものであるが、土層断面図と照合すると、新しい溝の底より下から出土したものと判断される。前半分の破片である。歯は差し込み式である。



第30図 第8号溝実測図 (1/50)



第31図 第8号溝出土木製品実測図 (1/3)

2は、用途不明の木製品。3は溝の西壁際の底面から出土した「しゃもじ」である。4も底面に接して出土した鍋の蓋と思われる木製品である。保存状況が悪く、柔らかい。5は箸であろう。6は丸木を輪切りにし、中央部を削り抜いたものである。用途不明。

これらの時期については、1、3、4は新しい時期の溝の底より下から出土しており、明治以前とすることができようか。

5 墓壙

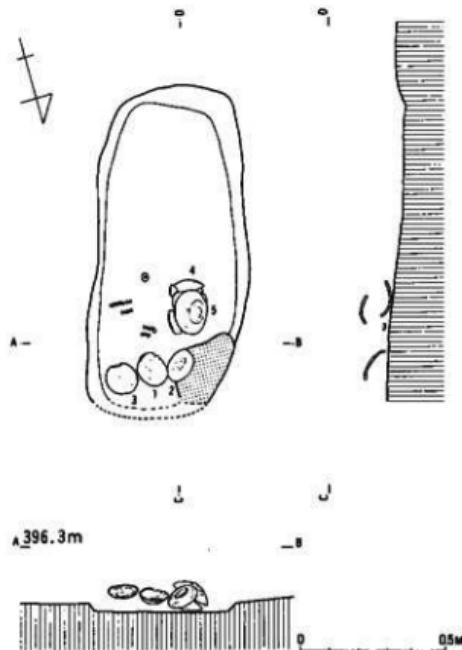
第1号墓壙（第24図）

第2区のB—1区画にて発見された。2号石列の北側に接している。85×60cmの椭円形である。遺構検出面の黄色砂層にて炭を含む黒色土の落ち込みが検出された。覆土を掘り下げたところ、数センチで底となってしまい、本来はより高い箇所から掘り込まれていたと思われる。僅ながら残っていた覆土中

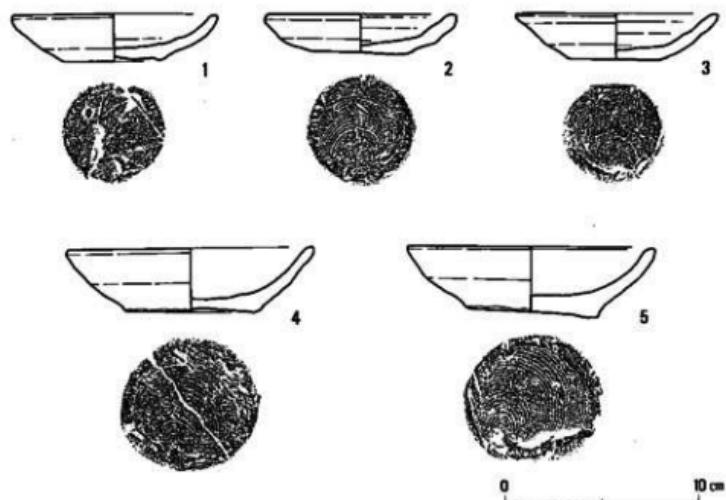
からは、多くの炭とともに
「ヒト」の頭蓋骨片が少量出土した。焼土がみられないことから、他の場所で焼かれ、その後墓穴に葬られたものと見なされる。伴出遺物はなく、
時期不明。

第2号墓壙

第2区のA—7区にて発見された。第2号建物群の南5m、第2号住居址の北3mに位置する。長軸1.15m、短軸55cmの隅円長方形を呈する。墓壙の下部が残っている程度で、壁の大半は削平されている。主軸は南北よりやや東に傾れている。底面に接して「ヒト」の歯が20本発見された。その付近から、古銭6枚・土師質土器5個が出土した。北隅に炭化物の粒子が散布していた（平面図スクリーン・トーン部分）。



第32図 第2号墓壙実測図 (1/20)



第33図 第2号墓壙出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

〔土師質土器〕 (第33図)

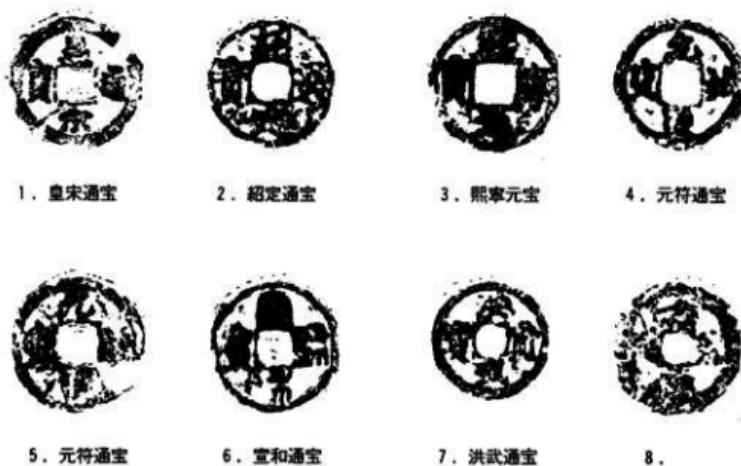
1 北壁際に3個が並んで出土したが、その中央から正位の状態で発見されたものである。明るい褐色を呈し、金雲母や砂粒を少量混入している。口縁の一部を欠損している。口径10.4cm、底径5cm、器高2.5cmを測る。底径がやや小さく、器体は緩い傾斜で立ち上がるが、口唇近くからやや強く内湾する。底部は突出し中央が薄い。

2 3個並んだ内の西側のもので、伏せられた状態で出土した。口径9.8cmと5個の中では最も小型である。全体に分厚く、器高2cmと浅い器形である。底部の突出程度は他の器に比べて少ない。体部の外面中央がふくらんでいる。内面底部中央がやや窪む。完形で、明るい褐色を呈し、赤褐色の部分もある。

3 3個並んだ東側のものである。壙底より10cm程浮いて、正位の状態で出土。口縁の一部を僅かに欠く。白朱のある淡褐色を呈する。口径10cm、底径4.7cmと底が小さい。底部はやや突出し、内面中央が窪む。体部外面中央がややふくらむ。

4 齒の西側から伏せた状態で出土した。口径12.5cmと5個の中では、5と並び最も大きい。底径6.7cm、器高3.2cmを測る。口縁の一部を僅かに欠損する。明るい褐色を呈する。金雲母、砂粒を少量含んでいる。底部はやや突出する。器体内部の湾曲がやや強く、いくぶん深い感がある。

5 4の上から出土したものである。口径、底径ともに4と同じ。器高も3.3cmとほぼ同じであるが、5の方が厚く重量感がある。底部の突出度は強い。金雲母を混入している。



第34図 銭貨（1, 2 1号A建物・3～8 第2号墓壙）（1/1）

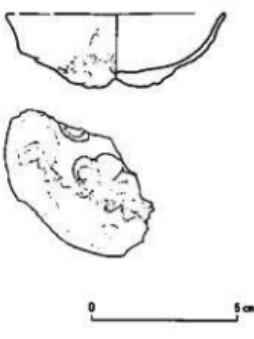
【銭貨】（第34図）

歯の南側からまとめて6枚が出土した。表面が粗れており判読が難しいが、「元符通宝」2枚、「宣和通宝」1枚、「熙寧元宝」1枚、「洪武通宝」1枚と思われる。1枚は不明。

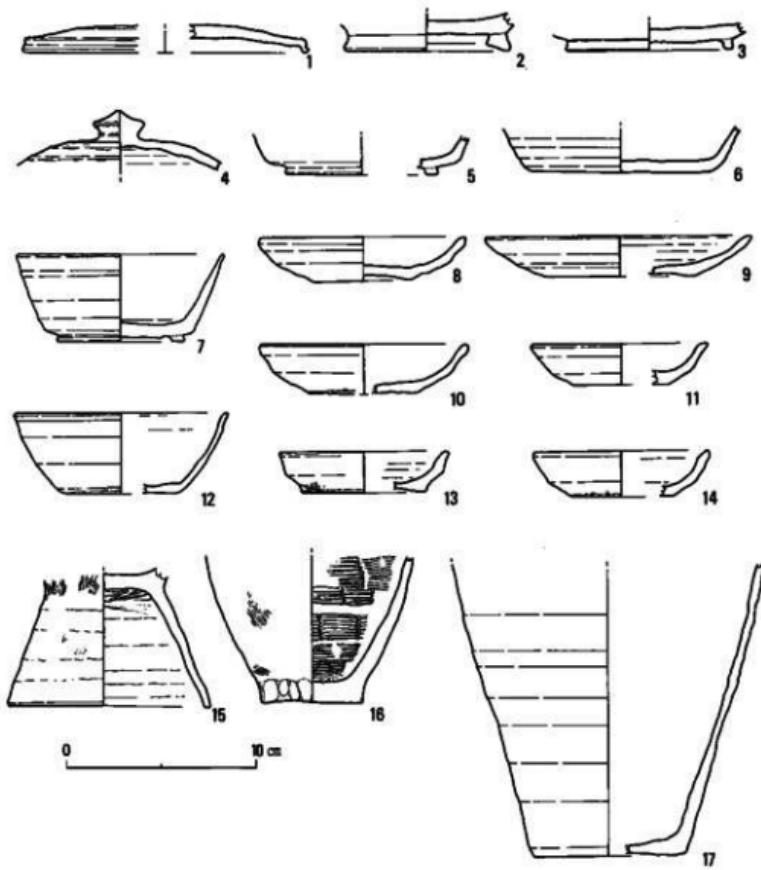
6 その他の出土遺物

第35図は第1区にて採集された遺物である。小杯であるが、外面が「オニ」の顔となっている。残念ながら3分の1強の破片で、口と鼻の一部が残っているだけである。素焼と思われるが、内面は白く塗られており、外面にも一部残っている。

第36図8・10・11・14は第2区のA-7区から出土した土師質土器である。8は4分の1の破片で口径10.8cm、底径5.3cmと推定される。浅い器形である。10も4分の1の破片で、口径10.8cm、底径5.6cmと8に似るが、こちらの方がやや深い。外面体部中央がややふくらむ。全体の器形は第2号住居址出土品（第23図2）に類似している。金雲母を多量に混入する。11は小皿の4分の1程の破片。口径9.2cm、底径4.9cmと推測され、底径は口径のはば2分の1である。器体は開き気味であり、外面体部中央がふくらむ。淡褐色で胎土は緻密。14は、口径9.2cm。底径5.4cmと推定される小皿の4分の1程の破片。胎土は



第35図 第1区採集品（1/2）

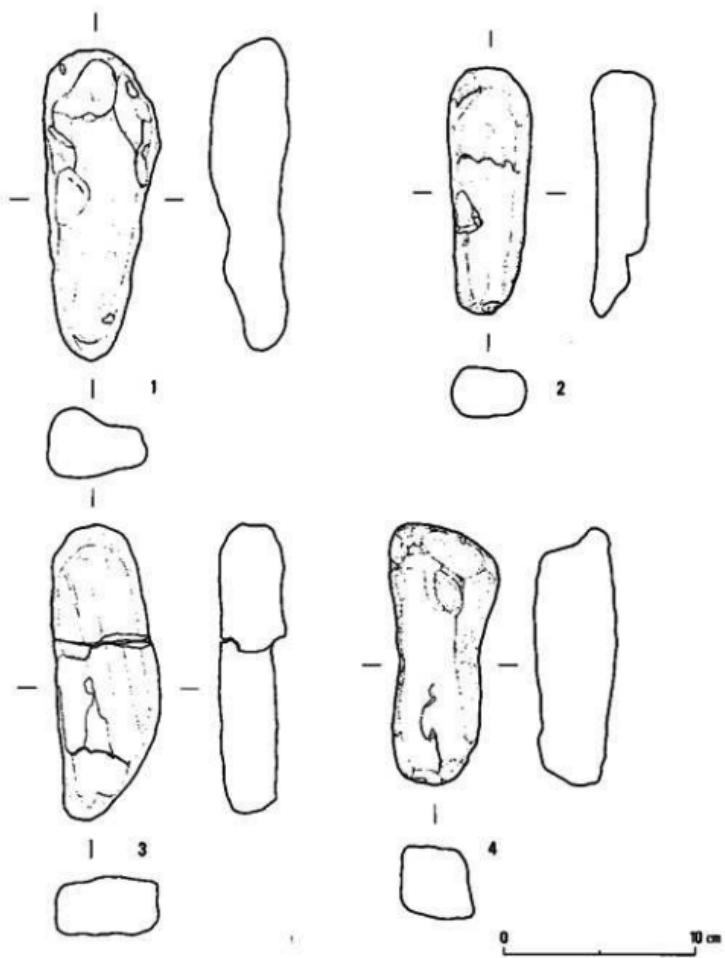


第36図 第2区出土土器実測図 (1/3)

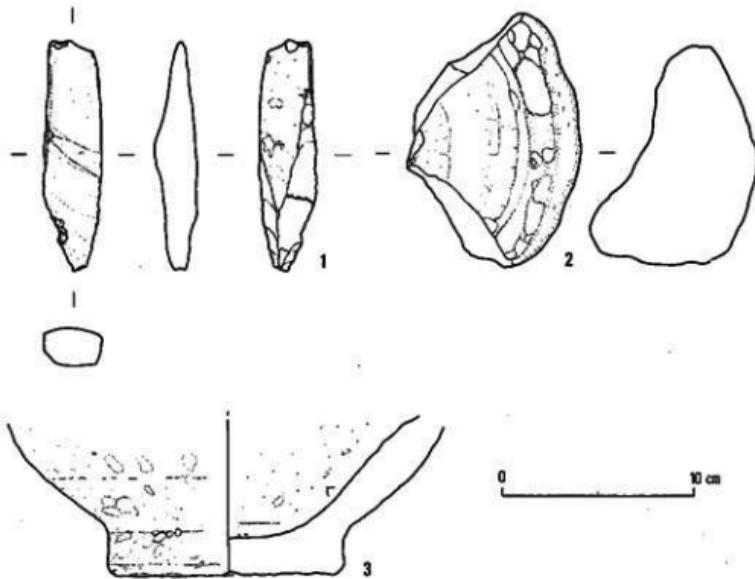
砂粒が多く堅い焼きで、13や第6号溝出土の2点（第27図7・8）と共に通する。第6号溝の2点に比して底部が小さく、口縁もやや開く。また、外面体部中央がふくらみ段がつく。底部糸切り。黒褐色を呈する。

13は第2区C—7区の小穴から出土した4分の1の破片。14に類似した小皿で、胎土の堅い黒褐色の土器である。口径8.9cm、底径6.6cmと底が大きい。

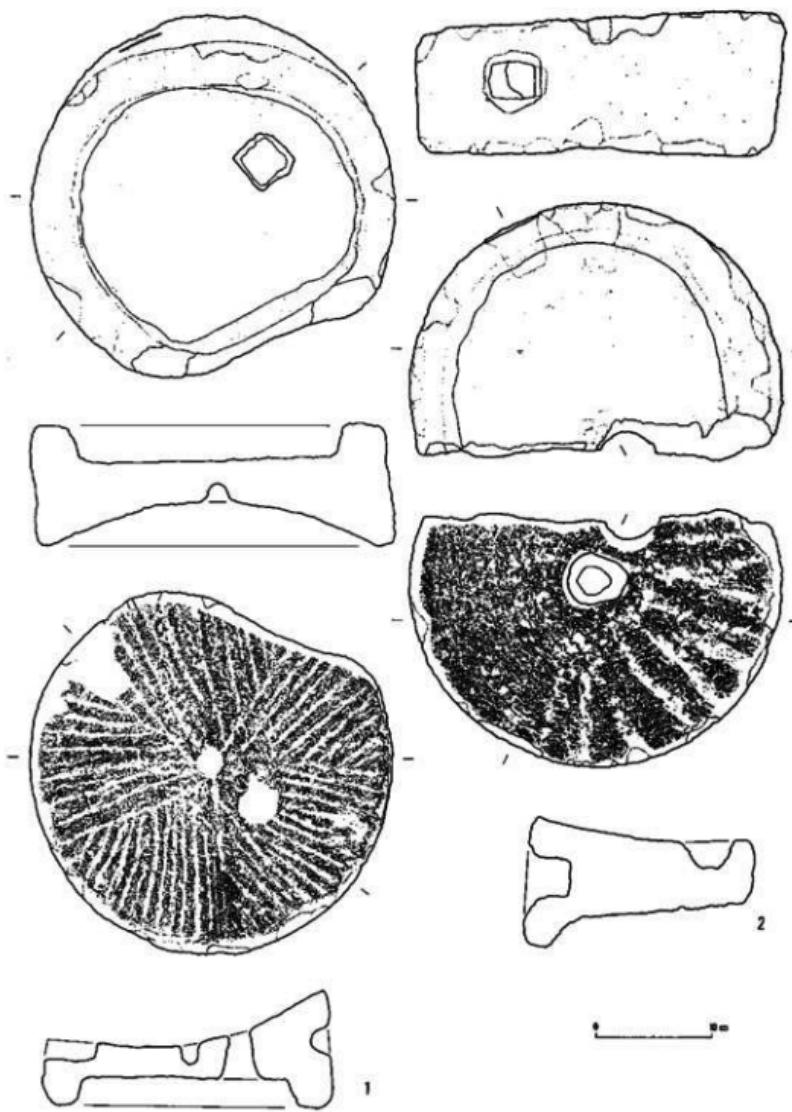
（新津 健）



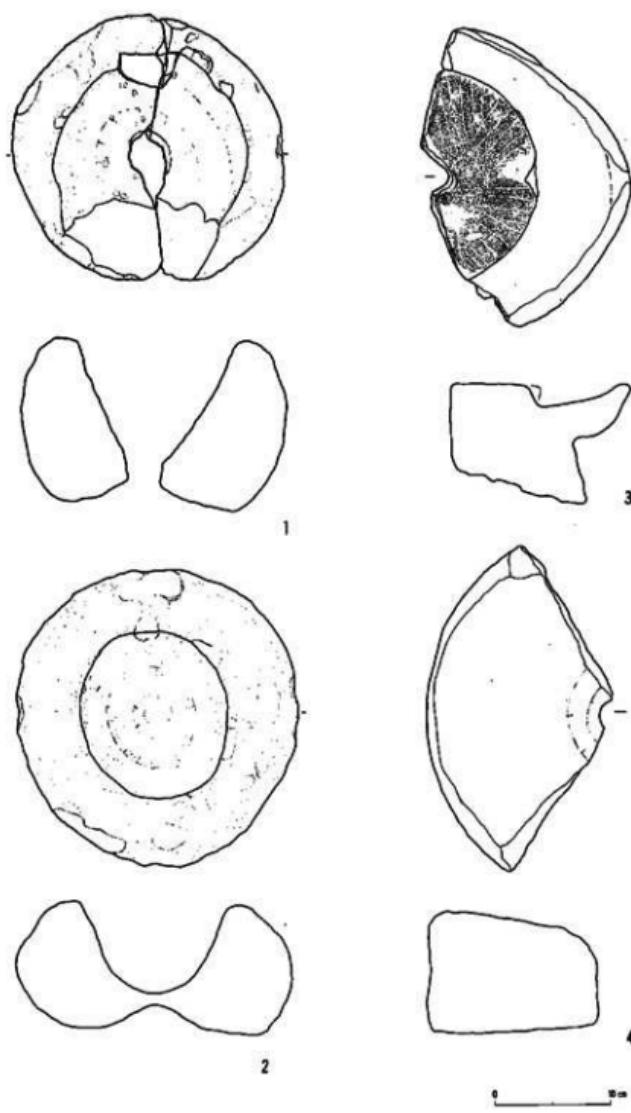
第37図 石器実測図 (1/3)



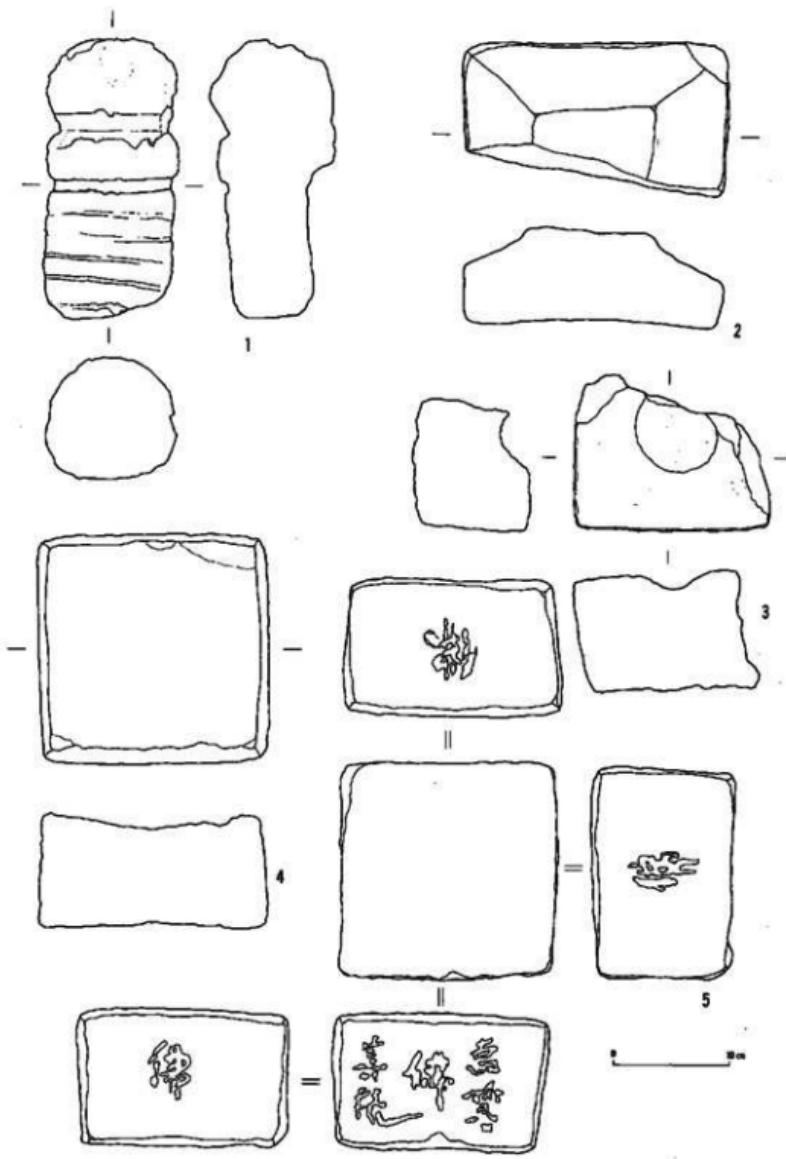
第38図 石製品実測図 (1/3)



第39図 石臼実測図 (1/5)



第40図 石臼・石製品実測図 (1/5)



第41図 石造物実測図 (1/5)

第4章 遺構・遺物の検討

第1節 弥生時代の遺構と遺物

大輪寺東遺跡では、弥生時代の遺構は検出することはできなかった。しかし、土器集中区を3ヶ所確認している。No.1については、御坊沢の後背地にある溝状の落ち込みより弥生から平安時代の土器片が出土している。このことから御坊沢の上流に、これらの時代の集落があったことが考えられる。No.2、3はいずれも流れ込みなどでなく、地面に張り付いたような状態で出土している。当時、遺跡の東側の地域は御坊沢がつくる低湿地であったことが推測される。これらの地区は水田として利用されていたに違いない事から、遺跡周辺には集落が存在していた可能性が強いのではないかと考えられる。

御坊沢よりも西側の地域には、これまで弥生の遺跡は発見されていない。しかし、扇端地域の湧水を利用した水田、集落の存在も十分考えられることから今後の調査に期待したいところである。

第2節 平安時代の遺構と遺物

1 住居址と土壌

大輪寺東遺跡では平安時代の住居址が2軒、土壌が1基発見されている。1号住居は大部分を削平されていて遺物はとても少ない。周溝から出土した須恵器の底部の破片は、いずれも9世紀前半に比定することができる。^① 罐から出土した變形土器も底部に回転糸切り痕を残し9世紀に比定することができるものであることから、1号住居は9世紀前半のものであると考えて良かろう。1号土壌は、1号住居と重複して存在する。断面観察によっても床を張った様子などもないことから、土壌は住居よりも新しいものであるといえる。

3号住居の窓内より出土した壺は9世紀第4四半期に比定することができる。^② 床面から出土した須恵器の壺、ロクロ整形の甕も總てこれと同期である。^③ 巨摩郡における9世紀第4四半期は、甲斐型甕の発達期である。^④ しかし、第3号住居からは、甲斐型甕は一片も出土していないことは、特筆されるべきことであるといえる。また、出土遺物のほとんどが住居の北西部に流れ込むように集中していることから、この時期の集落は第3号住居の北西側（現在の集落とほぼ同じ地域）に展開しているものと考えよかろう。今回の調査では、9世紀代の住居は2軒しか検出できなかつたので、当地域における集落の特徴を把握することは困難である。しかし、甲斐型の甕の破片が一片も出土していないことは、これまでの調査例と異なった傾向を持った住居であると考えられる。今後の研究に待つべきところが多いのではないだろうか。

（丸山哲也）

註 ① 板本美夫、末木健、堀内真「シンボジュム奈良・平安土器の諸問題—山梨地域」『神奈川考古』第14号 1983

② 同上

③ 同上

④ 板本美夫「甲斐型壺—編年について（1）」『山梨考古学論集』I 1986

2 第3号住居址出土土器の時代的位置付け

本遺跡出土の平安時代土器の総数は決して多いとは言えないが、3号住居址より一括資料としてまとまっている。今回は、この3号住居址検出の遺物に着目し若干の年代観等についての検討を行ってみたい。

山梨県における平安時代土器の編年については、1983年に坂本・末木・堀内氏によって行われたものが詳細なものといえ、その後、当時代の遺物量が増加するにつれ、研究者諸氏によつて、更に詳しい研究がなされているのが現状である。^①

なお、今回の年代決定にあっては、床面及び竪崩塗土中より検出されたものの中で、完存もしくは、それに近い状態のもので図示し得るものを基本とし、器種は、杯・甕類に限定しそれぞれを抽出した。

「甲斐型」杯は、竪内より検出の1点のみである(第12図1)。法量は、口径・11.4cm、器高・4.8cm、底径・5.5cm、を測る。外面下半には、斜位方向に手持ち箋削りがされ、内面には、放射状と推される暗文が施されているのがわざかながら見える。胎土は密であるが、焼成は、かなり軟質である。また、11.4cm > 5.5cm × 2 の範囲に入り、底径／口径比も約48%にある。口径に比べ底径の縮小が大きいようである。

須恵器杯は、4点検出されている(第12図3・8・9・11)。法量は、口径・5.4~7.4cm、器高・3.9~4.4cm、底径・5.4~7.4cmの範囲に入り、4点共全て、底部は回転糸切り未調整を呈する。

甕類は須恵器、土師器共に10点検出され、内訳は、須恵器甕が、1点(第14図2)、ロクロ整形土師器甕が9点である(第12図13・14・15、第13図1・2・3・4・5・6)。内、小型甕は2点である。ロクロ整形土師器甕の比較的残りの良い4点の観察状況は、全てが丸口縁を呈し器壁は肩部付近で約5mmを測る。胎土は、比較的大粒の砂粒子を多く含み、器体表面が粗く小さな凹凸が多い。肩部の張り具合も強い。第13図2・4・5の3点についても、胎土による印象より他のものと同じ丸口縁を持つロクロ甕の底部と想定できる。

須恵器甕は、洞部やや下半に「ナ」・「羊」の二文字の刻書が認められるもので、広口状を呈するものと思われる。

以上が第3号住居址内で先にあげた条件を満たす事のできる資料である。

甲斐型杯は、口径・底径 × 2 の範囲に捉えられ、底径の縮小化がみられるほか、口唇部のつくり、体部内外面の整形より畠期の様相が伺える。

須恵器杯は、口縁が若干丸みを帯びて立ち上がり、法量的には口径 < 底径 × 2 に示される範囲に含まれる。^②

ロクロ整形土師器甕は、口縁部及び肩部等のつくり、胎土などにより宮間田遺跡II期と、ほぼ同じ時期に比定したい。しかし、当住居址の場合、宮間田遺跡II期の甕より口縁が小形化し、なおかつ直立する傾向がみられ、更に、今後、宮間田遺跡II期内を細分化でき得る資料となる。

須恵器甕については、刻書の問題等があるが不明瞭な点が多い。

これらの出土資料の全体的な、感想をのべるならば宮間田遺跡II期の出土資料に非常に近い印象を受ける。また、ロクロ整形土師器甕以外の甕類は須恵器甕が1点検出されたのみで、同時期の当地域の住居址においては必ずと言って良い程、出土する甲斐型甕は、住居址覆土中の破片を一片残らず確認したが、全く抽出できなかった。このことは、意図的に甲斐型甕を使用していなかったと推測することもでき、かなり特異な様相を示している。

(吉岡弘樹)

註 ① 坂本美夫・末木 健・堀内 真 「甲斐地域」『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会 1983

② 平野 修 『宮間田遺跡』 武川村教育委員会 1988

③ 保坂康夫氏より御教示いただいた。

引用・参考文献

神奈川考古同人会 『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会 1983

清水 博 他 『メ木遺跡』 横山町教育委員会 1983

長沢宏昌 他 『北烟遺跡』 山梨県教育委員会 1985

米田明訓 他 『柳坪遺跡』 山梨県教育委員会 1986

平野 修 『宮間田遺跡』 武川村教育委員会 1989

保坂康夫 「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」 1988

山梨県考古学協会誌 2号

坂本美夫 「甲斐型坏一編年について(1)」 『山梨県考古学論集II』 1989

山梨県考古学協会

平野 修 「宮間田遺跡における墨書き器の展開」 『山梨県考古学論集II』 1989
山梨県考古学協会

第3節 戦国時代の遺構・遺物

1 土師質土器について(第42図)

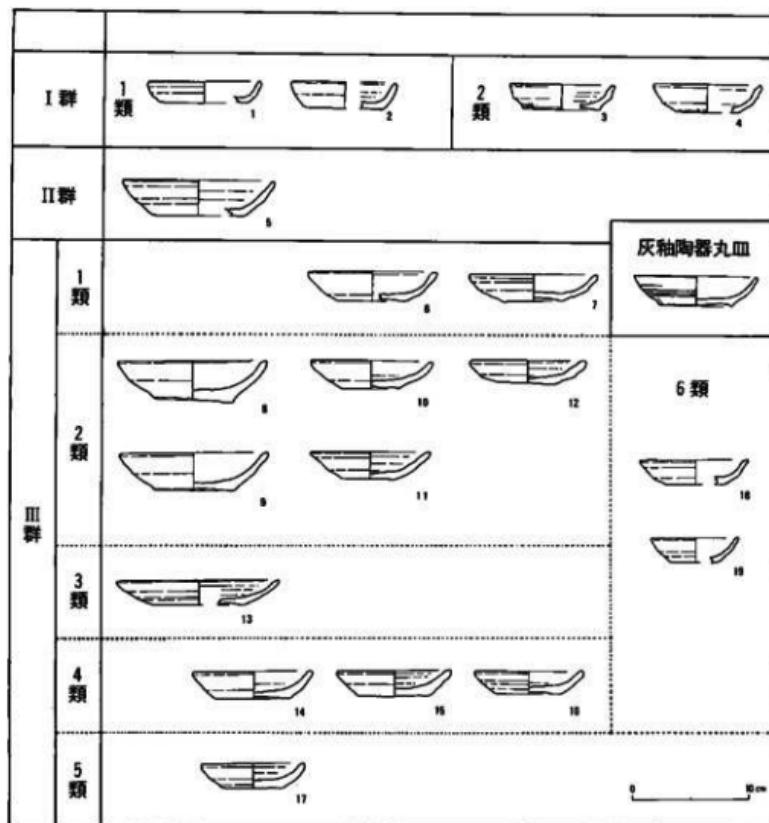
本遺跡からは、量はさほど多くないが、特徴的な土師質土器がいくつか出土している。そのなかには陶器を伴出したものもあることから、それらを参考に、編年上の位置付けについて検討してみたい。

①分類

[I群] 1・2(第6号溝)・3(C-7区小穴)・4(A-7区)の4点がある。これらは、胎土中に長石や輝石とみられる白色や黒色の粒子が混入した堅い焼成の土器で、他の土師質土器とは非常に異なるものである。器形の上から1類(1・2)と2類(3・4)のタイプに分類できる。

1類 底径が口径の75%以上と広く、器高のあまりない器形。体部の立上がりは急で、段は付かない。

2類 体部中央がふくらみ、段が付く。口径との比率は3が74%、4が58%である。



第42図 大輪寺東遺跡出土土師質土器の分類

〔II群〕 5が該当する。これは1区のB—8区黒色土中から出土したもので第1号建物群の範囲に当たる。器壁は薄く、深みのある器形を呈する。底径は口径の60%と、広い。体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁部にいたる。胎土はI群とは異なり、粒子は細かく、III群に類似。

〔III群〕 胎土はI群と異なり粒子は細かいが、焼成はI群のような堅い感じではない。胎土中に金雲母を含むものが多い。大きさや器形から6類に分類した。

1類 6（2号住居）は扁平な器形であるが、口縁内面は立上がりの傾斜がやや強い。体部外面中央がふくらみ段が付く。底径は口径の53%と、およそ二分の一。他に7（A—7区）がある。

2類 2号墓出土の5点を一括した。口径が11cm以上のもの（A）と、それ以下のもの（B）とに分けられる。

Aには8・9がある。深みがあり、底部はやや突出する。体部外面のふくらみはあまり顯著

ではない。底部は口径53%と、約半分である。

Bには10~12がある。7・8と比べて、やや扁平。底部の突出度もやや低い。11・12の外側はややふくらみ、段がつく。12のように器壁の厚いものもある。

3類 2号建物群の柱穴から出土した13がある。口径が13.5cmと大きいのに対して、器高2.1cmと浅い。口縁はやや肥厚している。底径は口径の55.5%。

4類 14~16は4号溝から出土した一括品。口径9~10cmの小皿で、器体は直線的に外傾して立ち上がる。15・16の外側部中央はややふくらみ、段がつく。15の底部は平坦である。底部と口径の比については、14が64%・16が59%と底が広いが、15はほぼ半分である。

5類 1区出土の17がある。全体に分厚く、やや扁平。底が広く、口径の60%程度である。体部は湾曲気味に立ち上がるが、口縁が短い。ザラつきのある胎土。

6類 18・19のような小皿を充てた。18(2区A-7出土)は、19に比してやや扁平で、口縁は僅かに外反する。器壁はやや厚く、底部はやや突出。19は1号石列から出土したもので、突出した底部から内湾気味に立ち上がる。口径7.4cm、器高2.1cmと口径の割には深い器形である。体部外側にやや段がつく。器壁は薄い。底径は口径の二分の一。

②編年的位置付け

I群の特徴は、底径が大きく浅い器形である。この特徴は県内ではあまり類例をみないが、1類については、鎌倉市藏屋敷遺跡で分類される「かわらけⅢ類A」中に類似した器種を見る事ができる。また、2類については甲府市小瀬氏館跡の出土品にやや近い感があり、同時に藏屋敷遺跡Ⅲ類Bに共通する可能性がある。一方、12世紀から13世紀と考えられている高根町当町遺跡出土の土師質土器とは若干様相を異にしている。従って、これらI群を13世紀中頃から後半に位置付けおきたい。なお、胎土や焼成についてもII群・III群とは相当隔りがあるものと思われる。

II群は1点だけであるが、5は小瀬氏館跡の出土品中に類似した器形がみられる。また、白州町坂下遺跡^①の水路状遺構石組上面やF-3区出土例に共通するものがある。小瀬氏館跡例は14~15世紀、坂下例は15世紀後半から16世紀前半とされている。本遺跡1号建物群は陶器から15世紀前半に遡りうることから、ここではII群土器を15世紀前半に位置付けておきたい。

III群1類6は、2号住居から出土したもので、内耳土器や灰釉陶器の丸皿が共伴している。特に丸皿は大窯第4小期とされ、16世紀中頃に位置付けられるものである。従って、1類土器は16世紀中葉を上限とした16世紀後半とすることができよう。比較的底径が大きく、口縁内面が短く急傾斜で立ち上がる感じの特徴がある。この土器を基準に他の類を検討してみると、2類Aは深い器形ではあるが底径と口径の比率において、1類に共通する。Bでは底径が小さくなる傾向があるが、全体の形は1類に似ている。但し、口縁の状況が異なっているとともに、底部が突出しているという差異があることから、1群とは若干の時期差があろう。なお、これらの土師質土器には「洪武通宝」が伴なっており、その初鉄1368年を遡ることはできない。いずれにしても16世紀後半に位置付けておきたい。3類は浅い器形であり、1類と比べると口縁の開

きが著しい。しかし、体部外面中央に稜がややのこり、1類との共通性を若干とどめているとも言える。4類は小皿であるが、器壁がやや厚くなり、体部の立ち上がりも単純である。しかし、14・15では外面中央に段がついている点は1類に共通する。1類より後出するものであろう。5類の小皿は分厚く、底径が大きいとともに体部が短いという特徴がある。4類より後出のものとみた。下限については、志野小皿が併出する豊富村横畠遺跡第5ピット群を参考にすると、幾分類似するものの様相に違いがあり、17世紀初頭までは降らないものと思われる。6類はやや突出した底部の小皿である。18はやや扁平な器形で、体部中央のふくらみが強いことから1類に近いものであろう。19は器壁が薄く、内湾気味に立ち上がる深めの器形であり、本遺跡ではあまり類例を見ないものである。

以上のように、本遺跡出土の土師質土器については、大きく3時期に分けられることができよう。これをまとめてみると以下のとおりである。

1期 13世紀中頃から後半	I群土器
2期 15世紀前半	II群土器
3期 16世紀後半	III群土器

こうしてみると、今回の調査で主体となるのは3期の16世紀後半といふことができる。しかし、時期決定に必要な陶磁器の出土が少なく、以上のような検討も推測の域を出ない。ある程度、確実性のある2号住居の資料を軸に検討を試みた訳であるが、共伴関係にある陶磁器について全般的に資料集成し検討する必要があろう。今後の調査・研究に期待したい。

2 各遺構の時期と性格

本遺跡からは建物群、住居、石列、溝、墓壙などが発見されたが、これについては第3章で報告したとおりである。しかし、これらの遺構が全て同時期に機能していたかどうかは疑問であり、ここではこの問題について各遺構の性格とも合せながら、検討することとした。

①第1号建物群

第1号溝により「コ」の字形に囲まれた空間に位置している。この空間は南北方向30mを測り、この中に少なくとも建物2棟分が建てられており、館跡を構成する一部に該当するものと思われる。出土遺物が少ないとから、正確に時期を決定することは難しい。しかし、少量ながらも陶磁器類が出土しており、時期決定に参考となる。まず、古くは12世紀代に位置づけられる白磁片がある。また、割花文や蓮弁文の見られる青磁片、同安窯系の青磁片などが出土しているが、これらは12~14世紀とされるものである。次に、国産の陶器では15世紀代の灰釉皿片・丸挽破片、16世紀中頃の天目茶碗片、等がみられる。さらに、備前系の擂鉢も出土している。特に灰釉皿片や擂鉢破片は、雨落の施設とみられる、建物を取巻く礎群中から出土しており、遺構の時期を決定できる遺物といえる。他に、伊万里系と思われる染め付け片(17世紀)や「尾呂茶碗」と称される瀬戸・美濃系陶器(18世紀代)等の近世陶磁器も出土している。その他の遺物としては、石製品や銭貨がある。特に銭貨では「皇宋通宝」「紹定通宝」等の北宋

銭・南宋銭が出土している。

以上の陶磁器や錢貨からみて、第1号建物群は戦国時代の遺構であることは間違いない、15世紀から16世紀後半という、戦国後半期から末期に位置づけることができよう。なお、建物の下層からも15世紀代とされる天目茶碗片が出土しており、第3号B構のように建物下部から検出された遺構もあることから、さらに古い時期の建物が存在していたことが考えられる。また、12~14世紀の白磁・青磁片については、建物群の時期がそこまで遡る可能性も考る必要もあるが、ここでは伝世されたものと考えておきたい。但し、今回の調査区は非常に限られた範囲であることから、館跡全体の構成や時期的な変遷については全く不明である。

一方、建物群が施築された後も、構等は水路としてしばらくの間は機能しており、地割も後世にまで引継がれていたと思われるが、このような土地利用の結果が近世陶磁器などの遺物の出土に繋がっているのではないか。特に水田として利用されてからは、暗渠の構築が頻繁に行なわれ、かつて用いられていた道具や施設である石臼・輪受石・五輪塔などが、暗渠の部品として再利用されたのであろう。「徳島堀」が開通した17世紀後半以降のことと思われる。

②第2号建物群

明らかに本遺構に伴うとみられる遺物は、柱穴から出土した土師質土器皿（第36図9）と内耳土器の破片だけである。第1号建物群では、白磁や青磁等の中国製磁器片が少量ながら出土したのに対して、2号建物群からは全く出土していない。第2区全体をみても中国製品は皆無であり、瀬戸・美濃系陶器も量的には少ない。館跡内における建物区画の性格の差を意味しているのであろう。いずれにしても、1点の土師質土器から時期を決定しなければならないが、前項で検討したように、16世紀後半代としておきたい。

なお、第2号建物を構成する4個の柱穴には柱痕が残っていたが、このうち3本は南東方向に傾いていた。現在、本遺構の北側約100mには、天井川であった「御坊沢川」が流れている。かつても、洪水を被り易い地域であったと思われるが、柱根の傾きも、このような現象に起因しているのかもしれない。

③第2号住居址

床面直上から土師質土器皿1点と内耳土器2点、それに柱穴内から瀬戸・美濃系の灰釉丸皿が出土している。灰釉丸皿（第23図1）は、藤沢良祐氏によると大窯第4小期に編年されるとのこと、16世紀中頃に位置付けられるものである。従って、本遺構は16世紀中葉を上限とした16世紀後半の住居とができる。特徴的な土師質土器（第23図2）や内耳土器（第23図3・4）が出土しており、これらの編年に参考となる。

④石列造構

1号石列からは志野皿片および古瀬戸碗破片が出土している。志野片は17世紀初頭、古瀬戸片も17世紀代に位置付けられるものである。他に、五輪塔の地輪と火輪が、石積みの中に含ま

れていた。墓あるいは供養塔として立てられた石造物も、このような石積みに利用されてしまっていたのである。この石列は「L」字状に延びているが、西側が1段なのに対して、東側は乱雑に2～3段積まれていた。この東側部分に丘輪塔が利用されているとともに、志野片もここから出土している。本来、館跡に関する施設としてあった石列上に、館跡廃絶後の17世紀頃、例えば烟の区画等のために、更に石が積まれたものではなかろうか。なお、石列の東側周辺から土師質土器が数点出土しているが、これらが石列に伴うものかどうかは不明である。

2号石列からは、砥石・ヒデバチ・アンペラ等とともに土師質土器1点（第25図3）が出土した程度である。この土師質土器は16世紀後半のものと思われる。ヒデバチと合せて戦国の遺構とすることはできよう。

これらの石列の機能については、特に1号については土壘の基底の可能性が考えられたことから、付近の精査を行なったが特に断定できる根拠はみあたらなかった。しかし、先述したとおり、第1号建物群がある1区と、石列のある2区とでは陶磁器類の出土種類に差異が認められることから、いくつかの機能に基づいた区画が館跡内に設定されていたと推測される。従って今回発見された石列も、このような区画割に関する施設と考えておきたい。

なお、1号と2号とでは当然時期差を考えるべきであろうが、詳細は不明である。しかし、1号のはうがより後世まで続いていることは、出土遺物から推測できよう。

⑤溝

10本が調査されたが、このうち第1号から第3号までは第1号建物群と一体となったもので、すでに検討したとおりである。

第2区にては、第4・5・6号の3本の溝が並んで発見されたが、このうち第4号は排水用の水路と思われるものである。この水路の水溜状に深くなった箇所から、漆塗り椀・曲物・折敷・蓋などの木製品とともに、土師質土器と内耳土器が出土している。時期的には土師質土器（第27図4～6）からみて16世紀代に位置付けられよう。

第6号溝からは土師質土器2片（第27図7・8）が出土している。13世紀中葉から後半とみられるもので、遺構の時期も4号や5号よりも古いものであろう。

第7号については詳細不明ながら、試掘の際に付近から天目茶碗片が出土していることから、16世紀以降ということはできる。

第8号からは近世磁器破片と木製品が出土している。近世・近代の水路であるが、戦国期にまで遡るかは分らない。

第9号・10号については不明。但し第9号は2号住居を切っている。いずれも覆土は周辺の小穴に共通することから、戦国期のものではあろう。

⑥墓塚

1号墓塚については時期のわかる遺物がなく、全く不明。

2号墓塚からは、古銭6枚、土師質土器5点が出土した。古銭には「熙寧元宝」（初鑄1068

年）、「元符通宝」（初鑄1098年）、「宣和通宝」（初鑄1119年）、「洪武通宝」（初鑄1368年）等がみられる。特に明鏡である「洪武通宝」が出土していることから、墓壙の時期の上限は、14世紀中葉を越ることはない。流通期間や副葬品ということを考慮すると、むしろ15世紀以降としたほうが妥当であろう。土師質土器の特徴からは、むしろ16世紀代に位置付けられようか。

以上、各遺構の時期とそれらの性格を検討してみた。これによると、今回の調査区では13世紀後半および、15世紀から16世紀にかけての遺構が発見されたことになる。6号溝および小穴群の一部が13世紀後半に位置付けられるが、中心となるのは15～16世紀代の遺構で、その中でも16世紀代が主体であろう。第1号建物群は15世紀代に置けるが、16世紀後半まで機能していたと思われる。特に建物群を取り囲んでいる1号溝はさらに後まで用いられていたのであろう。その他、16世紀後半の遺構としては第2号住居址がある。さらに土師質土器や内耳土器からの検討を加えると、第2号建物群・2号石列がこれに加わり、さらに4号溝や第2号墓壙も16世紀代に位置付けておきたい。

一方、1号石列は17世紀代にまで下り、8号溝は近世・近代に位置付けられる。また、縦横に走る暗渠施設は、戦国期遺構群が廃絶された後、近世・近代をとおして構築され続けたものと見られる。

3 甘利氏館跡と大輪寺東遺跡

「甲斐国志」によると、大輪寺を中心とした地域に甘利氏の館が所在したという。

「〔甘利氏居跡〕上條北割村 大輪寺ノ境内是ナリト云壘障ノ形今尚巍然トシテ存セリ東西百間南北貳百間餘ナルベシ南ツ大庭北ツ北門ト云東ニ矢立的場西ニ大堀ト呼ブ地名アリ皆隕歟トナレリ」

すなわち、甘利氏の館の一隅に大輪寺が建てられたもので、館の規模は「東西百間南北貳百間余ナルベシ」と記載されている。大輪寺は現在、「甘利山大輪寺」と称する日蓮宗の寺院である。現状では、西側の墓地から竹林にかけて土壘の一部と見られる高まりが認められる他、寺の南側に「大庭」・西側に「大堀」・北側に「北門」・東側に「矢立・的場」等の地名が伝えられている。

ところで、「甘利氏」については、佐藤八郎氏「甘利氏の興亡」『韮崎市誌』^⑥に詳しい。甘利氏は、甲斐武田氏の祖である武田信義の子一条忠頼の次子、行忠に始まるとしてされる。行忠は、甘利の庄司としてその地に居館を構えたことから「甘利」姓を名乗ったと言われている。忠頼・行忠親子は、源賴朝の挙兵以来共に活躍したが、1184年から翌年にかけて二人とも賴朝により殺されたという。しかし、「甘利氏」は行忠の子行義により再興されている。このように、甘利氏は12世紀後半に始まっており、從って、居館の開始もその頃に求められよう。

その後戦国時代に入ると武田氏の有力武将として、甘利備前守虎泰とその子左衛門尉昌忠の

名が挙がっている。武田信虎・信玄に仕えた虎泰は、天文17年（1548年）信濃上田原にて討死。虎泰の死後、元服後に昌忠を名乗る嫡男「藤三」が家職を繼いだとされている。信玄に仕えた昌忠は、永禄10年（1567年）に没している。

昌忠の後は「三郎次郎」および「次郎四郎」なる者が家督を繼いだとも言われているが、詳細は良くわかっていない。但し、大輪寺の由緒を記した『甲斐国社記・寺記』の「大輪寺銘細帳」によれば、武州池上本門寺にて法華宗を修め「慶受院日国」と号した、昌忠の次男「甘利三郎次郎」が、天正18年（1590年）にそれまでは別の地にあった真言宗の大輪寺を「甘利備前守城旧地」に移し、法華宗に改めるとともに亡父昌忠を開基とし謨を行なったとされている。

おそらく、館内に大輪寺が移された頃が「館」の最終段階であったと思われ、武田氏の滅亡した1582年を境として、12世紀後半から400年に亘り続いてきた「甘利氏館」も、その機能を閉じていったのであろう。

さて、前項で述べたように大輪寺東遺跡の調査では、戦国期後半の遺構群が発見されたが、溝等で囲まれた建物群の存在や、量的には少ないが各種の陶磁器類や漆製品が出土しており、「館跡」と見なして問題ないと思われる。しかし、それが「甘利氏」の館であると断定できる資料は得られなかった。これについては、限られた範囲での調査ということもあり、今後の調査・研究に待たねばならない。しかし、「甲斐国志」に記載された館跡の所在が、調査により確認されたことは大きな成果であったと言えよう。

ところで、「甲斐国志」に言うように、ここが「甘利氏」の館跡であったとしたら、時期的には問題はない。調査の成果は、館跡の時期を15世紀から16世紀後半と導き出した。これを甘利氏に当はめてみると、虎泰・昌忠の活躍した時期にも該当することになる。さらには昌忠の子三郎次郎・次郎四郎の時に「甘利氏館」の機能が終焉を迎えたとするならば、それらの時代をも含めて、調査結果と合致している。17世紀以降の遺物は少なく、あったとしてもそれらは「館跡」としての遺構には、結びついていないからである。

一方、「甘利氏館跡」の始まりについては明確な資料は得られなかった。しかし、13世紀後半と思われる溝と小穴群が調査された他、それらの近くからグリッド内出土ながら13世紀から14世紀に位置付けられる瀬戸灰釉瓶子破片が出土しており、本遺跡が鎌倉時代に遡りうることが確認された。一方、第1号建物群からは12世紀～14世紀代の中国磁器が出土したが、この時期の遺構と見なされるものは確認できなかった。戦国時代の武将にとって古い中国製品を所有することが一般的であったとしたならば、これが出土してもさしつかえないことになる。少なくとも今回の調査区内からは、甘利忠頼・行忠時代の遺構は発見されなかつたことになる。

但し、調査では9世紀平安時代の住居2軒が発見されており、古くから集落が営まれていたことがわかる。この地一帯は倭名抄記載の「余戸郷」の一角に該当するとも思われ、集落を支えるに足る高い生産力を持った地域であったと考えられる。さらに中世にはその基盤を維持、「甘利庄」としてその名を残しているが、その要地たる「大輪寺」の地に「甘利氏館」が構えられたことは十分に考えられるところである。

いずれにしても今回の調査は、道路建設予定地という限られた範囲であったことから今後の調査に期待される点が大きい。

なお、今回調査された館跡の西約1.5km離れた小高い山の頂上を中心に、堀切や土塁を伴う施設が確認されている。頬平と称され、『甲斐国志』にもその名をとどめている。「（前略）甘利左衛門尉ノ停候ヲ置キシ処ナリ上平カニシテ頬ノ形ニ似タリ（後略）」。「館跡」と一体を成す、要害の山城ともみられている。

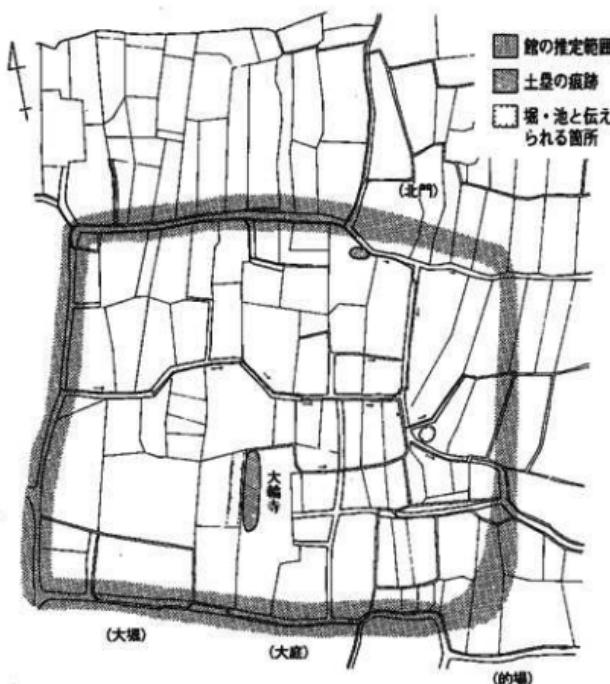
4 館跡の範囲

今回は幅12m、長さ220mという限られた範囲での調査であったことから、館跡の全貌を知るには至っていない。しかし、今回の調査で発見された遺構が、館跡全体のどのような位置に当たるのか検討する必要はあろう。

「甲斐国志」には館の範囲が「東西百間南北武百間」と記されているが、これが主郭を表現したものなのか、あるいは外郭を含めたものなのか定かでない。地籍図では、道路に囲まれた方形の区画をみるとできる。第43図のスクリーン・トーンで囲まれた区画であるが、その範囲は東西約200m、南北約180mで、「甲斐国志」の記述とは異なっている。この区画の中央部には、区画を南北に分断するかのように、道路と水路が西から東に走っている。水路が設けられていることから、この部分は幾分低くなっている箇所と思われる。実際、調査1区と2区との間にはかつて池があつたと聞いている。従って、この道路・水路部分は館跡内を区画していた施設、例えば堀ないし溝が設けられていた可能性もある。このラインを境として、仮に南側をA区画、北側をB区画とすると、今回の調査の1区はA区画に、2区はB区画に該当する。特に、2区の南端から発見された2基の石列はB区画にかかる境界施設という見方ができよう。1区からは中国磁器を含めて陶磁器の出土が目立ったのに対して、2区からは出土量は少なく、特に中国磁器が皆無であったという違いは、少なくともA・B二つの区画が存在していた可能性を裏付けるものかもしれない。さらに各種の機能に基づいた複数の区画を考えるべきであろう。

この区画については、現在の大輪寺の西側に土塁の一部とみられる高まりが残っており、地元の人によると、かつてはこの土塁の外側（西側）に堀状の痕跡が見られたとのことである。これが館跡の西端なのか、あるいは内部を区画する施設なのか断定はできないが、付近の地割を参考にして、館跡の範囲はより西に寄った、南北に走る道路部分にまで延びていたものと考えておきたい。

また、調査の際に3区とした箇所は、地元で「北門」と呼んでいる箇所の一部であったが、特に館跡に関わる施設は発見できなかった。従って、2区と3区の間を東西に走る道路が館の境界であったと思われ、同時にこの付近に「北門」なる施設があったことも考えられるところである。東側の範囲については、道路等のラインが明確ではなく、よくわからないが、「鍵の手」状に曲がった道路付近に境界を求めてみた。この箇所は、大輪寺に至るかつての参道が始



第43図 館跡の範囲

まる所である。

以上、館跡の範囲については、第43図に示した範囲を主郭と考えておきたいが、これはあくまでも最も発達した時点での範囲と思われ、時期によりその広がりに増減があったことも考える必要がある。今回の調査結果では、13世紀・15世紀・16世紀等の遺構が発見されているが、13世紀の遺構は2区に限られていたことも参考になる。いずれにしても、今回の調査地区は、館跡の東端に近い部分に該当したものと考えられる。館跡全体からみると幅12m、長さ220m程度の調査にすぎず、以上の問題についても今後の調査に待たなければならない。

(新津 健)

(参考文献)

坂本美夫「山梨県に於ける15世紀以降の土師質土器編年」一境川村寺尾出土品を中心に『甲斐考古』20-1 1983

(註)

- ① 小川裕久、服部実喜『藏里敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 1984
- ② 伊藤正幸「甲府盆地における十二・三世紀の土器様相」『山梨考古学論集』II 1989
- ③ 高根町教育委員会『西原・当町遺跡』 1987
- ④ 折井 敦『坂下遺跡』白州町教育委員会他 1988
- ⑤ 保坂康夫『横畠遺跡・赤二郎遺跡』山梨県教育委員会他 1987
- ⑥ 佐藤八郎『甘利氏の興亡』『並崎市誌』 1978

図 版



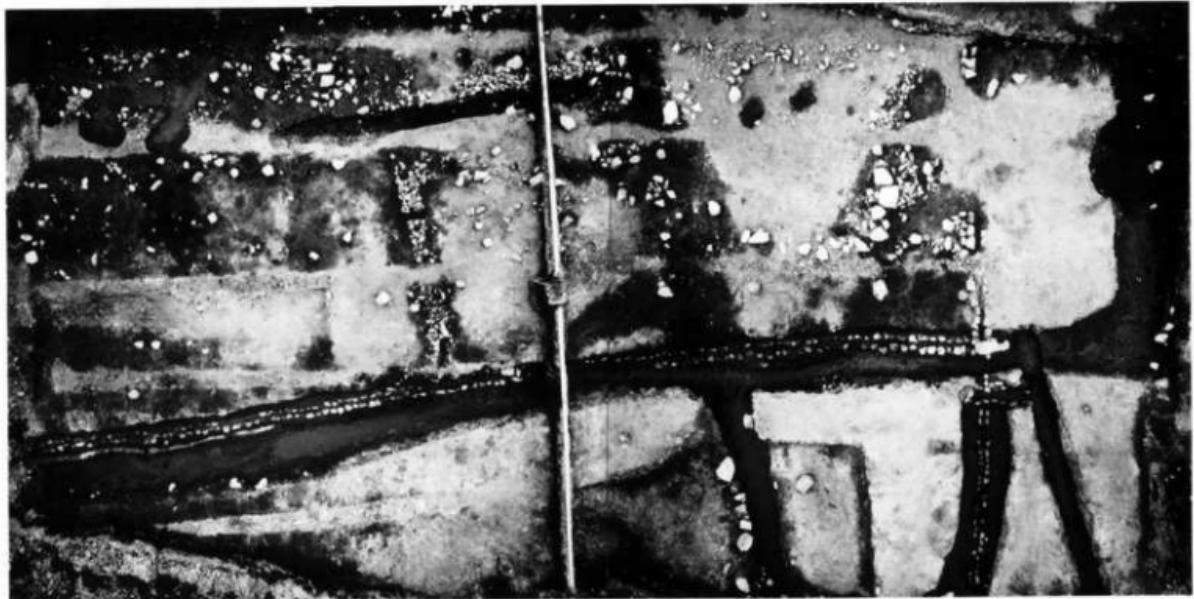
大輪寺東遺跡遠景



大輪寺東遺跡近景



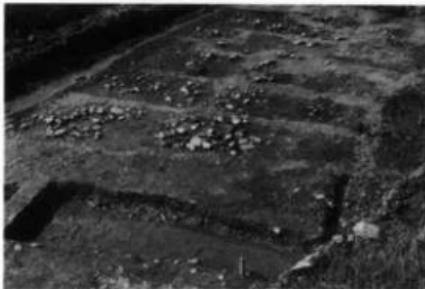
大輪寺東遺跡 1 区と大輪寺



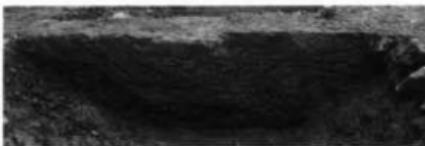
第1号建物群



1 第1号建物群B
(北側より)



2 第1号建物群B
(南側より)



3 第1号溝
セクション



4 第1号建物群A
第1・2号溝



5 第1号建物群A
下部



6 第1号建物群A
発掘作業風景

図版3

図版4



1 暗渠検出状態



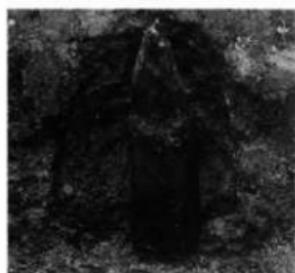
2 暗渠蓋石除去状態



3 暗渠交差状態



1 第2号建物群



2 第2号建物群
P 4 檢出狀態 | 3 第2号建物群
P 2 檢出狀態

4 第2号建物群 P 3 檢出狀態

図版 6



1 第2号住居址



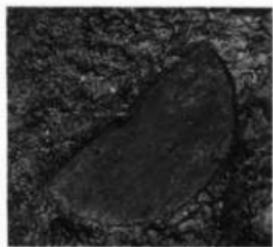
2 第2号住居址出土土器



3 第2号住居址柱根検出状態



1 第4・5・6号溝



2.3 第4号溝遺物出土状態

4 第4号溝セクション

図版 8



1 第4号溝発掘
作業風景

2 第8号溝

3

4

5 第4号溝遺物出土状態



1 第1号・2号石列，第1号墓墙



2 第2号墓墙

图版10



1 第1号住居址·第1号土塘



2 第3号住居址



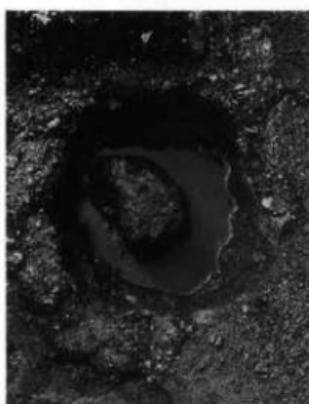
1 第3号住居址西側部分



3 第3号住居址置き柱



2 第3号住居址カマド



4 第3号住居址柱根（南）



5 第3号住居址柱根（北）

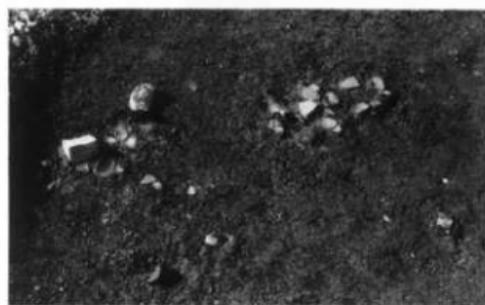
图版12



1 土器集中区 1



2 土器集中区 2



3 土器集中区 3



1



4



2



5



3



6

7

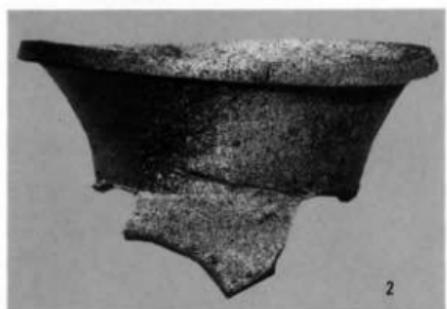
8

1. 2 土器集中区 3 3 土器集中区 2

6. 7 土器集中区 1 8 土器集中区 3

4 土器集中区 1 5 土器集中区 3

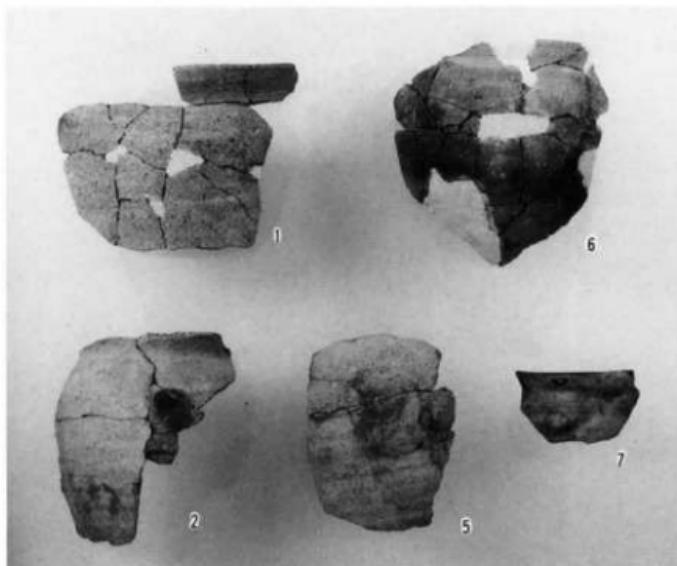
图版14



1 第1号住居址 2 第1号土壤 3.4 第3号住居址 5.6 第1号住居址
7.8.9 第3号住居址 10 第3号住居址カマド内



1 第3号住居址出土刻畫土器 2, 3 刻畫部分

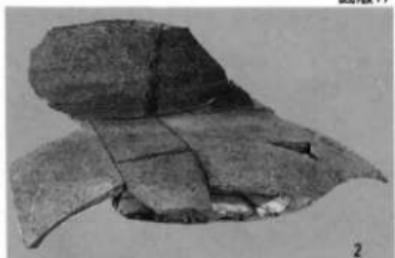


1.5 第3号住居址力マド内

4 第2区 B-11区

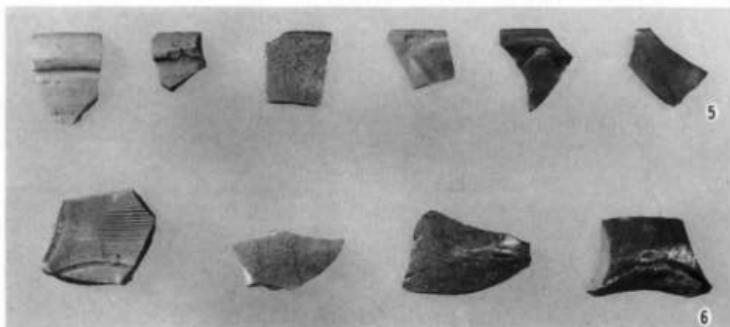
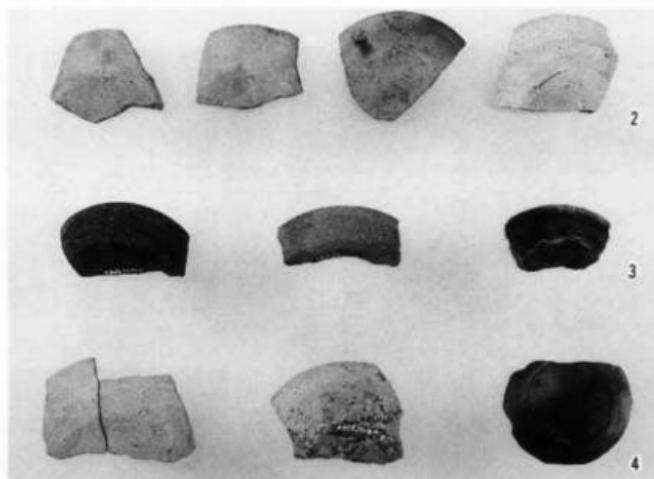
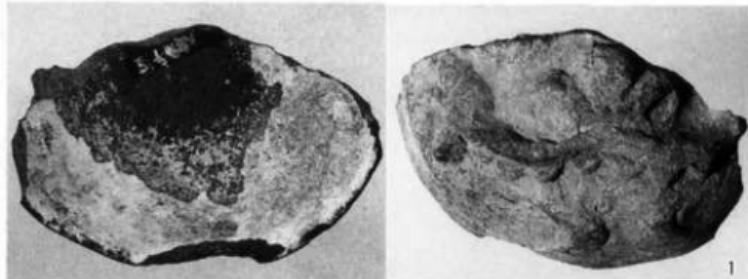
2.6.7.8 第3号住居址

3 土器集中区4

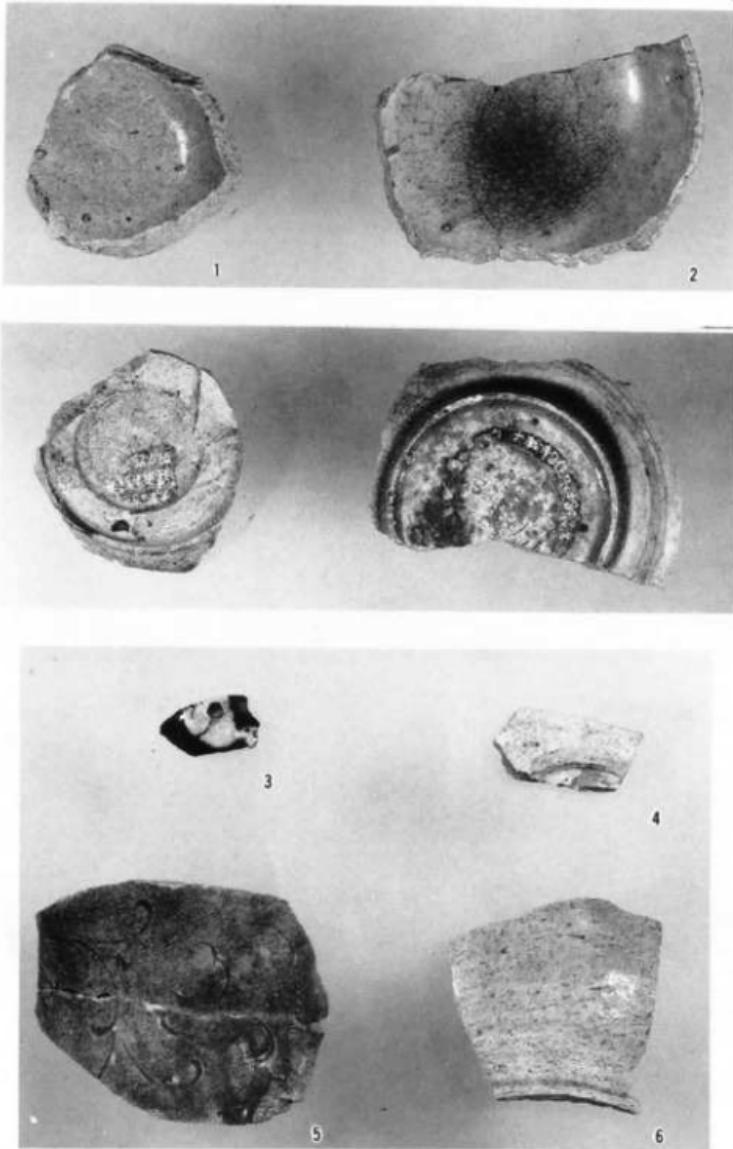


1, 2 第3号住居址 3 第2号墓塚 4, 5 第2号 住居址 6, 7, 8, 9, 10 第2号墓塚

图版18



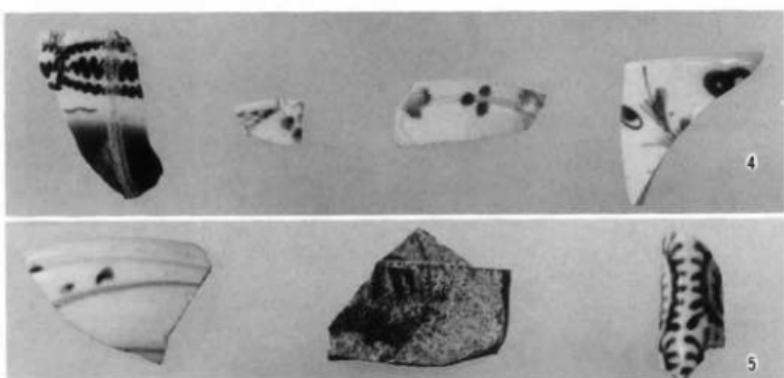
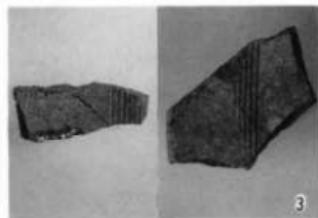
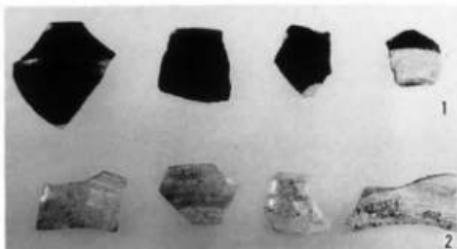
1 1区采集遗物 2.3.4 土師質土器 5.6 白磁. 青磁



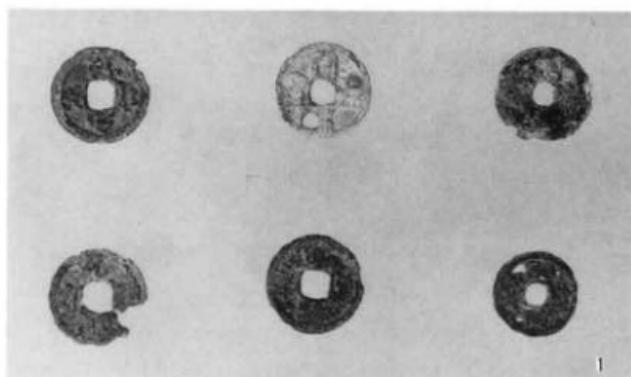
1 第1号建物群出土陶器 2 第2号住居址出土陶器 3 第2区 B-4区

4.6 第1号石列 5 第2区 B-8区

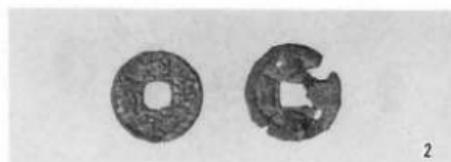
図版20



1 ~ 8 陶磁器片



1



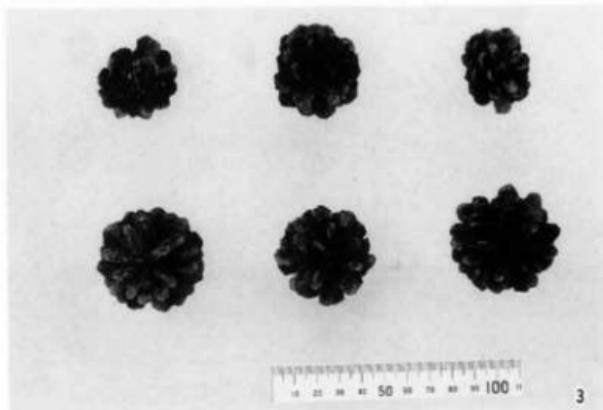
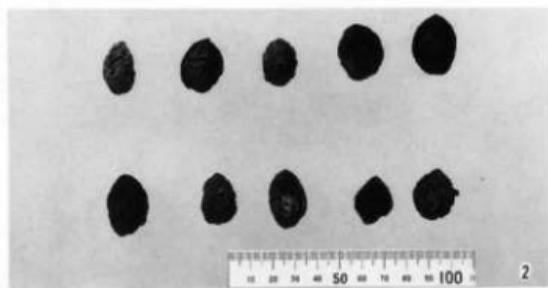
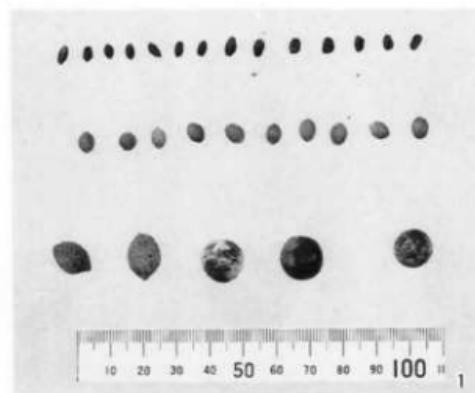
2



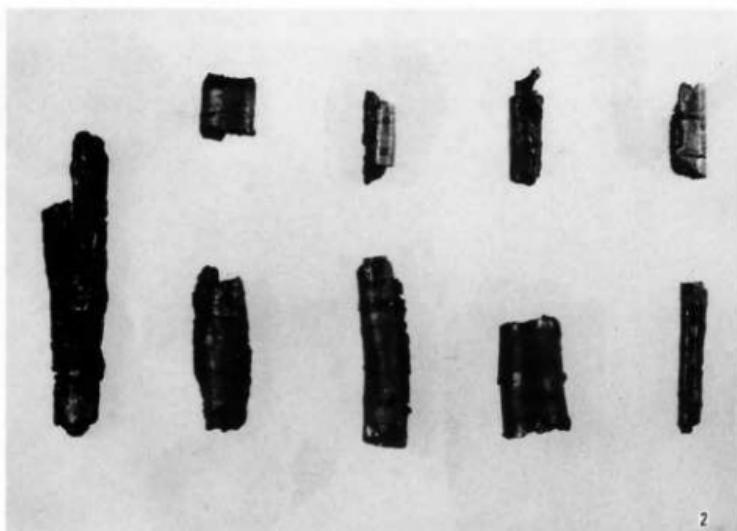
3

1 第2号墓填出土錢貨 2 第1号建物群出土錢貨 3 第1号溝出土自然遺物

図版22

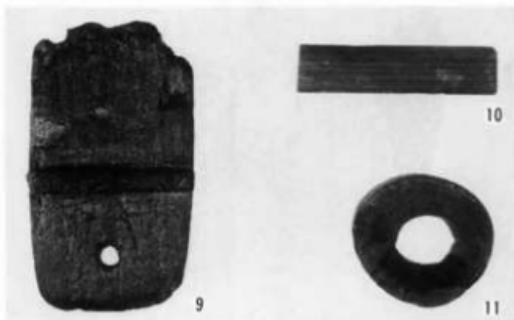
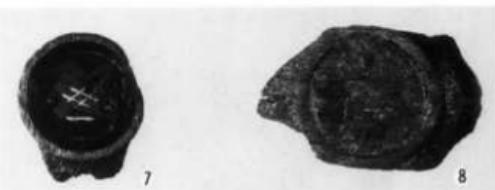
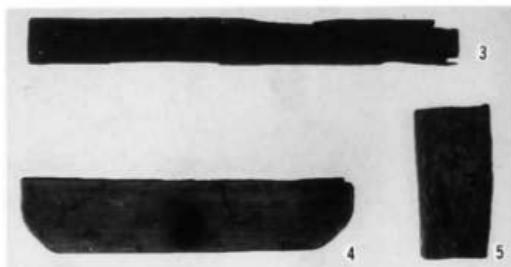


1, 2 第4号溝出土自然遺物 3 第1号溝出土自然遺物



1 第4号溝出土自然遺物 2 第4号溝出土桜の皮

図版24



1～8 第4号溝出土木製品

9～11 第8号溝出土木製品



1

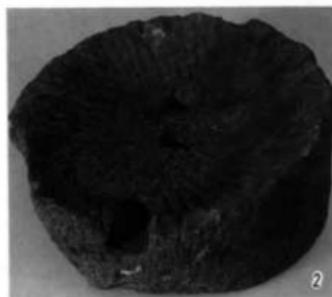


2

1 第2号石列出土編み物 2 石製品、鉛滓



1



2



1 第1号建物群出土茶臼 2 暗渠出土石臼

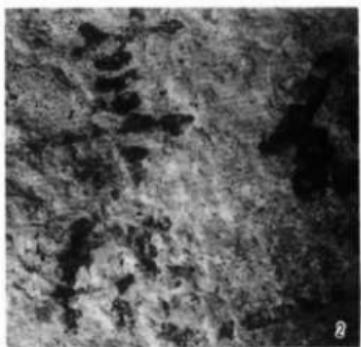


1 暗渠出土石製品

2 莊崎市内出土石製品

3 第1号石列出土五輪塔

4 暗渠出土五輪塔

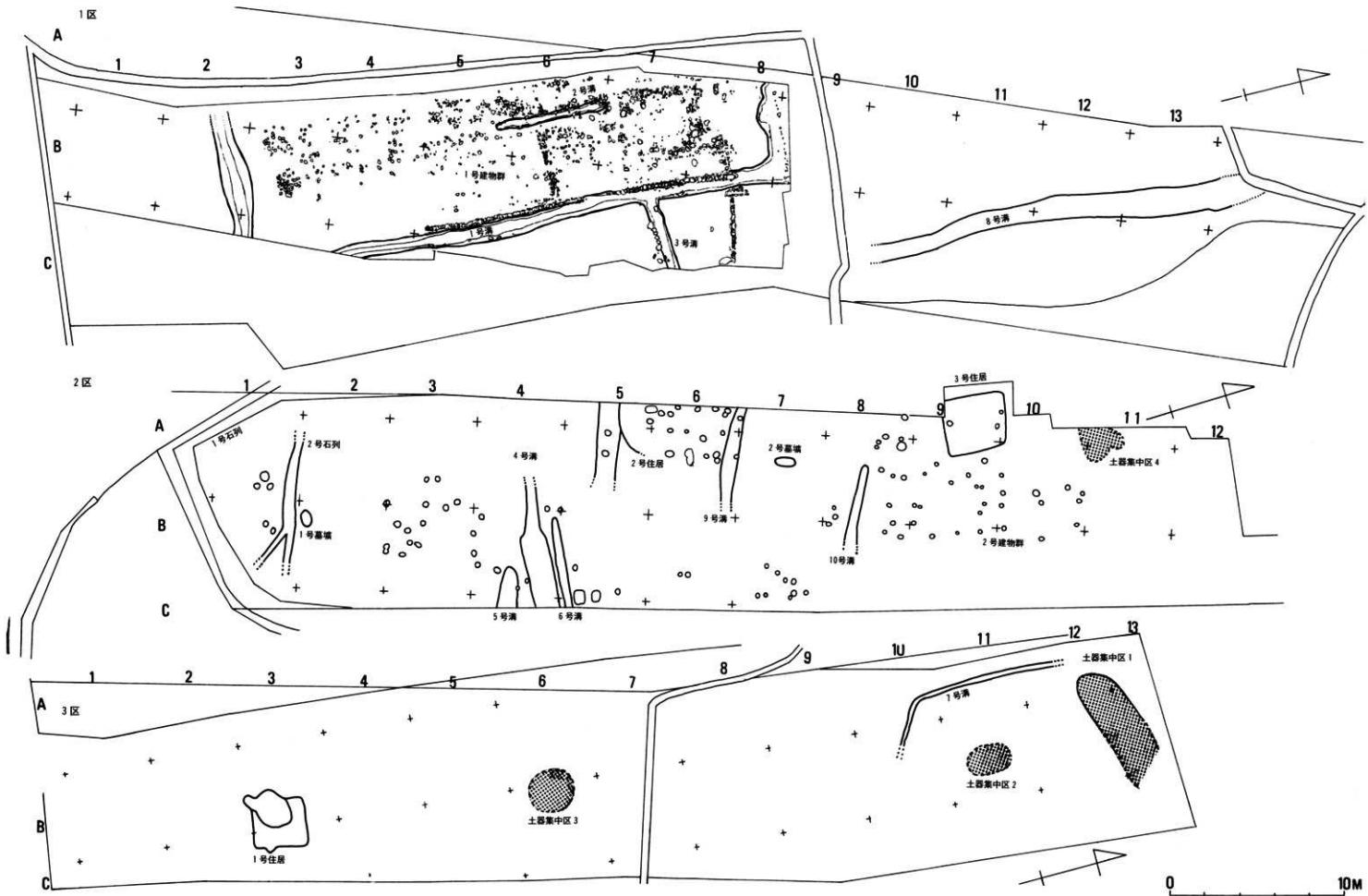


2



3

1 第1号石列出土五輪塔 2.3 墨書部分赤外線写真



付図 遺跡全体図 (1/200)

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第53集

1990年3月20日 印 刷

1990年3月30日 発 行

大輪寺東遺跡

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社 少國民社
